

2015年度 地域の子ども研究会

“地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指す”

目次

研究活動の報告

● 前半テーマ

- 保護者支援 ~保護者と保護者同士の関係を築く為に~
- 保護者支援 ~保護者支援の方法~

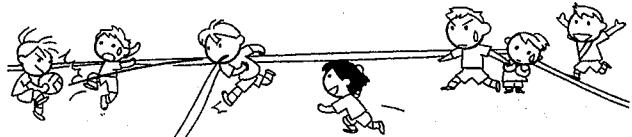
● 後半テーマ

- 遊びと育ち ~あそぶ経験が子どもを育てる~
- 学童保育の役割とは ~O.B・OG座談会から子どもの気持ちを紐解く~



子どもたちとの活動の報告

● 第30回ともだちドッジボール大会



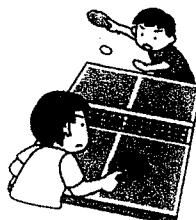
● ともだちフェスティバル



● 第20回子ども将棋大会



● 春のあそび大国



● 第64回大阪市子ども卓球大会



● 自然体験活動ワークキャンプ

研究活動の報告と1年の振り返り

● あそび研修会



● 研究会時間内での情報交換について

● 第9回 児童部会について

● 指導員一人一人の振り返り

研究活動の報告

前半テーマ
(4月～9月)

保護者支援 ～保護者と保護者同士の関係を築く為に～

保護者支援 ～保護者支援の方法～

後半テーマ
(10月～3月)

あそびと育ち ～あそぶ経験が子どもを育てる～

学童保育の役割とは ～OB・OG座談会から子どもの気持ちを紐解く～

保護者と保護者同士の信頼関係を築くために

【研究活動メンバー】

藤田凪紗(平和の子子どもの家)・隈元まひる(育徳園子どもの家)・大川亜樹(阿さひ保育園つくし会)・大西奈々子(望之門学童クラブ)・大山彬子(長居子どもの家)・坂本晴佳(やまと保育園子どもの家)・藤原由佳子(都島児童館)・星里真衣(愛染橋児童館学童クラブ)

【研究テーマに至った経緯】

研究活動の中では、日々保護者と関わる中で気になる子どもの保護者と職員とがどう信頼関係を築いていくか、そのきっかけはどうしているのか、気になる子どもだからこそ子どもへの願い・配慮の仕方などを保護者と共有することが難しい等の悩みが見えた。

考え始めていく中で、気になる子どもの保護者（気になる保護者）だから関係を深く・支援を丁寧に…、気にならない子ども（保護者）だから支援が手薄くても良いといったものではないと考え、気質によって関わり方を柔軟に変えていく必要はあるが、どの子ども（保護者）にとっても同じように支援していくという視点で考え、保護者と指導員との信頼関係を築くきっかけ作りや保護者に対しての個別アプローチ、保護者集団へのアプローチなど各施設で行っている支援方法を情報交換し、そこから見える利点や自施設で行うと想定しての課題点などを共有し自施設で活かす事、研究活動として資料をまとめる事で次世代の指導員となる方へ繋げていくことができればと、研究テーマを『保護者と保護者同士の信頼関係を築くために』と設定した。

【研究活動の方法】

- ・各施設の保護者に対しての取り組みを共有し、一覧を作成。
- ・取り組み内容からねらいや方法、利点や自施設で行うと想定した際の課題点などを共有し自施設で活かせるよう検証。
- ・各施設で実践、考察。

【第1章～保護者と保護者同士の関係づくりにつながる各施設の取り組み～】

各施設の保護者への取り組みを情報交換し、一覧としてまとめる。その際「保護者と信頼関係をつくるきっかけ作り」「保護者同士を繋ぐ取り組み」「保護者集団へのアプローチ」「保護者への個別支援」「学童保育への理解を深める取り組み」「その他」の6つに

分類する。(資料 1)

取り組み内容についてはねらいや方法、利点や課題等を明らかにし、実践時の参考となるようにする。

○各施設の取り組みの検証

1 学期はほとんどの施設で、保護者に対して学童の目的や活動への理解を図る場を設けている。夏は、保護者と児童とが一緒に行う取り組みが多く、ねらいとして交流だけではなく学童保育への理解が盛り込まれている。2 学期では各施設独自の取り組みが増え、保護者を巻き込んでのものが多い。3 学期は児童・保護者・指導員が共に 1 年を振り返り、6 年生をお祝いする形の取り組みを行っている。また年間を通して、写真の掲示等を行い学童の様子を伝え、保護者会を中心に定期的に集まりを行うなどの取り組みもされている。

しかし資料 1 をまとめると中では、年間を通して保護者への働き掛けを各施設で心掛けているにも関わらず、指導員と保護者がどう信頼関係をつくっていくのか、保護者同士がつながるにはどうしたらいいのかとの悩みが解消されていない事が明らかとなつた。これにより第2章実践へと至る。

【第2章～保護者と保護者同士の関係づくりにつながる実践～】

○ねらい

実践により保護者と指導員が信頼関係を築く一歩となり、学童の活動への理解が深まり、保護者同士がつながる事で悩みを共有できるような関係作りを目指す。

○取り組み方

- ①保護者との信頼関係を築く上での現状の課題を明確にする。
- ②各施設の取り組みを参考に課題解消に向けた実践方法や実践時期の検討を行う。

各施設での実践に際して課題を共有し、それぞれの施設に応じた方法へと柔軟に変更・企画する。

③各施設にて実践、経過観察

④実践を受けて、共有・課題検討

- ① 保護者との信頼関係を築く上での現状の課題を明確にする。

資料 1 をもとに話し合いをする中で、「迎えに来る保護者が急いでいてなかなか声が掛けづらい」「子どもの（あそんでいる）様子を見ることなく帰ってしまう」「塾が優先されてしまう」等、保護者自身が日々の生活に追われていることや子どもの放課後の姿を把握されていない（意識の薄さ）、指導員との信頼関係が築けておらず相談に至らなかつ

たエピソードなどもあり、日々の保育の中で保護者となかなか信頼関係を作ることが出来ていない事が見えてきた。

②各施設の取り組みを参考に課題解消に向けた実践方法や実践時期の検討を行う

日々の活動・あそびの中から保護者と繋がるきっかけを作り、子ども達の放課後の姿を保護者と共に理解する為、N 施設で行っていた『親子であそぶ時間を設ける～あそび ウィーク～』の取り組みを参考に、各施設に応じた実践方法を考える。また、保護者にねらいを伝えるだけでなく、早くから知らせる、日程を3日から1週間と参加しやすいように設定する、場所(部屋)確保など保護者の立場に立って配慮し検討出来るよう、それその施設状況を研究活動内で共有し、実施に向けて方法を討議した。

③各施設にて実践、経過観察

保護者の方に参加してもらえるようにと、呼びかけた方法

- ・日程・内容・意味をポスターの掲示や学童だよりにて全体へ知らせる。
- ・連絡ノートなどで連絡を取り合う。
- ・子どもたちに伝え、保護者に誘いかける。
- ・当日、遊び途中にお迎えに来られた保護者に声掛け。

各施設で実践してみた内容

- ・保護者会主催、親子花火大会の実施
- ・夏休み、キャンプの様子の写真掲示
- ・子ども達と指導員の間で流行っている遊び（ドッジボール、サッカーキックベース、トランプ等）に保護者を誘いかける。
- ・3日間、遊びを設定して実施。（月/けん玉、火/カプラ、水/トランプ）
- ・2泊3日の琵琶湖キャンプに、保護者の方が参加。

取り組んでみての様子・反応

- ・参加した保護者は子どもの遊びに興味を持ち、指導員に対して保護者から声をかけてくれることが多くなったように思う。
- ・家族での楽しかった出来事を次々と話してくれ、楽しい会話ができた。
- ・自分の子どもがケンカでもめていると、指導員が入って話し合うのを聞き、頭ごなしに怒るのでなく、嫌な気持は認めてあげようという話ができた。
- ・新入所の保護者から日々の生活・あそびが見られたとの意見があった。
- ・いつもお迎えが遅く、土曜日は忙しくて行事参加が難しい保護者が喜んでいた。
- ・保護者とゆったりとあそびている時の子どもの表情がとてもよかったです。
- ・保護者から得意なあそびを子どもとしたり、保護者が教えていると他の保護者も一

一緒に挑戦する姿がみられた。

《課題》

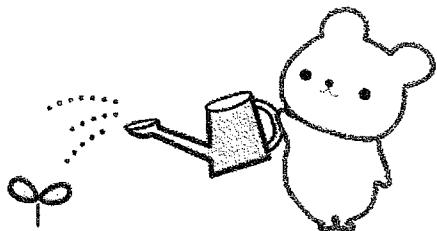
- ・断られた＝信頼関係が築けていないと直結して考えるのではなく、会話の延長線で誘ってみるが断る方も多く、保護者にとってあそびの輪に入りづらい空気があったのだと感じる。
- ・行事などにあまり参加しない、お迎えに来られないなどこちらの意図していた保護者の方の参加に繋がらなかった。

④実践を受けて、共有・課題検討

参加してくださった保護者の方は他の取り組みへの参加も見られ、基本的に学童に対して友好的で時間に余裕のある方が多く、良い反応が多かった。しかし多くの保護者は日々の生活に追われて時間に余裕がないのも事実であり、参加に繋がらなかつた方も多い。また初めての取り組みであそびに入りづらいところもあったように思う。なかなか声を聞けず関わりの少ない保護者に対して、日々声を掛けていく大切さを感じた。その上でどのように信頼関係を築いていくのかが課題である。

各施設で例年している取り組みでは、今回の研究活動を受けてねらいや目的を職員間で再確認・再検討して実施することで、指導員と保護者や子どもを入れて3者での会話のきっかけができたなど、日々の生活の中に保護者と話すきっかけや機会はたくさんあることが再認識された。

各施設の実践を振り返る中で、取り組みを今回だけのものとせず継続していくことで、保護者が参加しやすくなり、そのねらいをより理解してもらえるのではないかと考える。



【まとめ】

当研究活動で『保護者との信頼関係を築くきっかけ作り』『保護者同士がつながるきっかけの一歩』『学童への理解』をねらいとして行い概ね達成できた。

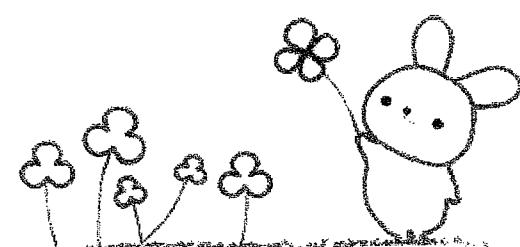
子どもの成長と共に考え見守っていくためにも、保護者との信頼関係は大事である。それを築く第一歩のきっかけ作りとして、自施設で取り組んでいることだけではなく、他施設の取り組みを情報交換し、指導員としての視野を広げられた事は今研究の成果だと言える。

また、各施設が保護者への取り組みを出し合う中で、自施設で例年行っている行事だが本当にこの取り組みが保護者支援につながっているのか、保護者同士のつながり作りになっているのかを改めて見直し、他施設の取り組みを参考に、どうすればもっと自施設に応じたものにできるのか職員同士で話し合うきっかけともなった。今後は孤立している保護者や顔の見えない保護者に対して、保護者の生活リズムに合わせて個別にできる企画を考え、悩みに応じて取り組み内容を柔軟に変更していくことが必要である。

地域の子ども研究会加盟の多くの施設は乳児・幼児期から一緒に育ってきた子どもたちが児童へと成長して集い、放課後を過ごしている。その保護者同士もまた、子どもたちが乳幼児期から共に成長を見守ってきたつながりを持つ。学童期になり、日々の生活の忙しさから保護者同士のつながりが弱くなっていることもあるが、今後も乳幼児期からのつながりを大切に、更に保護者同士のつながりが深まるよう取り組んでいきたい。

前提には行事や何か特別な取り組みをする事だけが信頼関係を築く方法ではなく、やはり日々の子ども達と指導員との関係作りの中で子どもが楽しみ充実することが、保護者の安心につながり、信頼関係を築く事に必要不可欠であることを念頭に、これからも保育、保護者支援に力を注いでいきたい。

文責：育徳園子どもの家 喂元 まひる



2015年度前半 研究活動【保護者支援】
「保護者支援の方法」について

【研究活動メンバー】

佐藤 剛（今川学園子どもの家）角中 恒介（やまと保育園子どもの家）多賀井 潤一郎（今池子どもの家）吉野 裕志（阿さひ保育園つくし会）舟島 直樹（四貫島友鄰館子どもの家）川畑 亮輔（長居子どもの家）

【テーマに至った経緯】

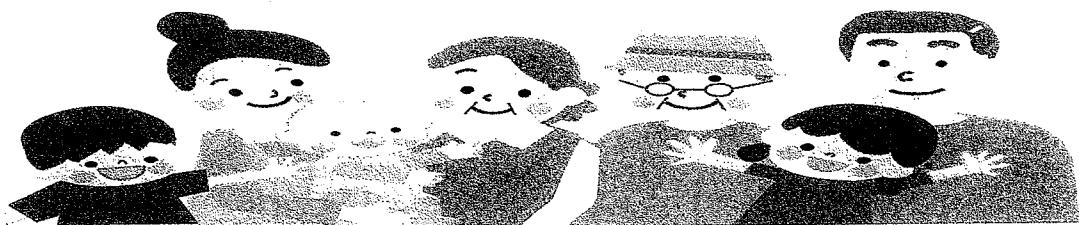
近年色々な特徴の保護者が増えてきた。中には「モンスター」とまで言われる保護者もいるほどだ。長年この職業を続けている人たちでも、保護者への対応や、支援の方法には悩む姿も見られる。それに、ケースも様々で、ひとつひとつの事例をまとめなければすごい量になる。長年勤めている職員でも悩む事があるのに、新しく指導員や保育士になった人たちが悩まないわけがない。誰しもがこの世界に入ってすぐでは、「保護者支援」なんてわからない事が多かったと思う。そこで「就職してすぐの人たちでも、保護者支援の流れや、大事な事がわかるような表があればいい」と話があがり、作成する事になった。そして覚えることが多い新人職員に分厚い文献を渡すよりも、できるだけシンプルに、わかりやすくしたほうがいいと思い、シンプルにという所にも重きを置いて活動した。

・ねらい

施設で見られる保護者の姿の事例を数人で深め共通する箇所を探り、だれがみてもわかりやすいように、シンプルに表に表すことで新しく指導員、保育士になった先生や、保護者支援で悩んでいる先生たちが、何が大事な事か、保護者支援の流れはどんなものか、わかるようにする。

・方法

- ① よく見られる施設での保護者対応（支援）の情報交換。
- ② その中から各施設事例をあげて、深める事例を1つに絞る。
- ③ 1つの事例を複数の人数で深め、共通している箇所を探す。
- ④ 共通している箇所をシンプルに表にまとめていく。



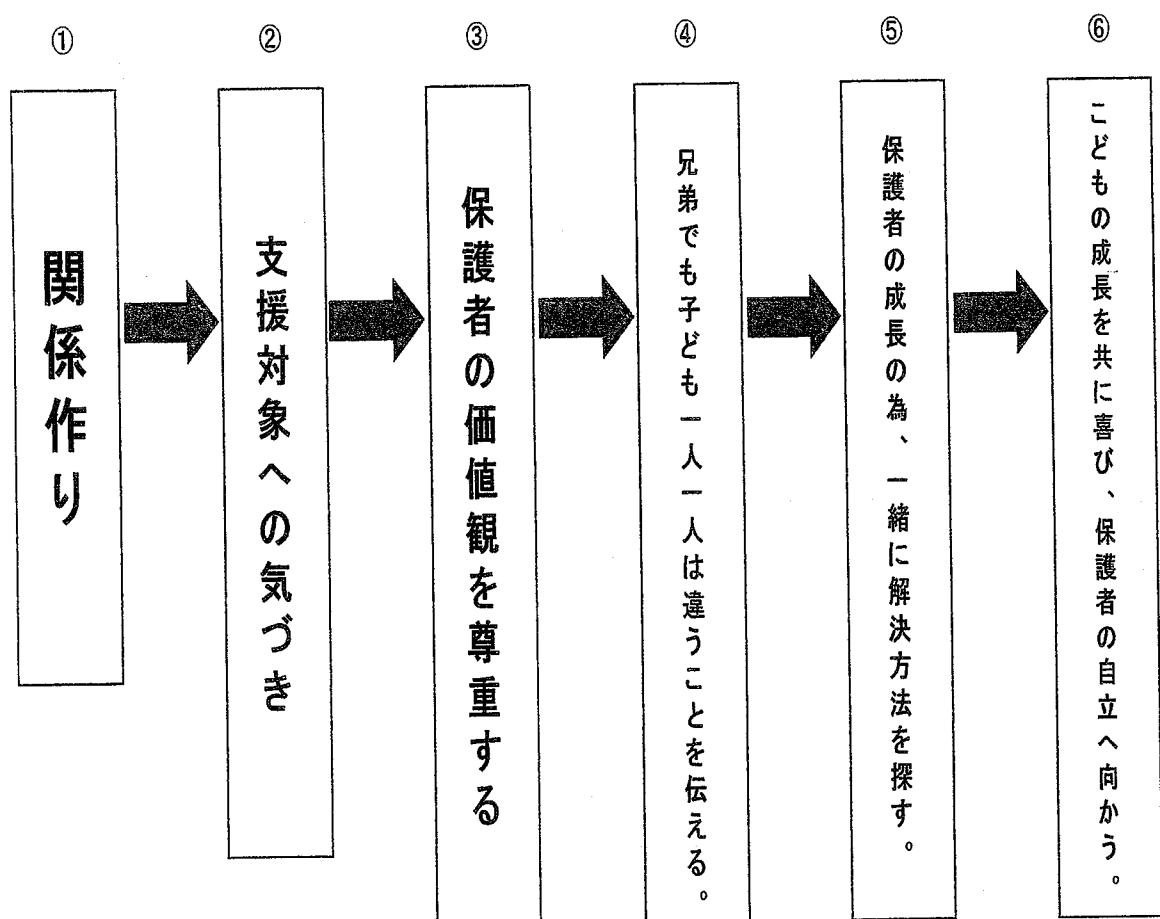
・活動内容

事例として「兄弟の扱いに差がある親」という事例をあげた。

兄はおっとりした性格でよく親に注意される事がある。弟はそんな兄を見ている事もあり要領よく行動することができる。その部分を弟と比べられる事が多く「兄はあんなんだから」「弟はできるのに」と、兄が否定的に扱われる事が多い。

この事例について深めた所、色々な意見が出てきた。しかしそこには同じ関わりや大切にするべき事が重なるところが多くあった。その重なったところを「キーワード」としてまとめていき、議論した結果「関係作り」・「保護者の価値観の尊重」・「保護者の自立」・という所の重要性が見られた。

これをもとに表として表してみた所、次のような表になった。



【まとめ】

まず初めに関係作りを保護者と関わる中でのスタートにした。いくら知識があり、解決方法を知っていても良い関係を築いていなければなんの意味もない。保護者支援の基盤になる所であるので、普段の生活の中で良い関係を作っていく。そして支援対象への気付き。普段の生活の中で疑問に感じる事を施設内で話し合い、相談して行く。疑問に感じる事を放っておいてしまうと、気付いた時には遅かった。という事になりかねないので大切にしたい。次に保護者の価値観の尊重と支援方法。保護者の方には色々な子育ての考えを持っている。その考えを全部否定してしまうと、こちらの話に耳を傾けてくれなくなる事もある。保護者の方の考えに寄り添い、その考えに沿った方法を提案して支援していく。そして一緒に解決方法を探し、成長した時には一緒に保護者の方と喜び、保護者の自立へとむかっていけるように支援していく。

シンプルに表にした場合事例の内容が変わったとしても大きく変わることころは④のことろだけだと感じる。（特殊な事例は除く）しかし表にした関わり方をしていても、どこかでつまずいてしまったり、保護者の方にうまく伝わらなかったりして、表から離れていくこともある。保護者の行動や変化によってもっとこの表を派生させていかなければいけない事も多いと思う。しかし表にあるように保護者支援の最終の目的は保護者の自立であると考えると、そこに向かう中、表から外れていった保護者の方でも、指導員が軌道修正をしていければゴールは一緒であると思う。

今回はこのように単純化し、できるだけシンプルに、わかりやすく、という所に重きを置いたので、本当に重要なところを切り取っただけである。本来はもっと細かな支援をたくさん行っている事であると思う。しかしこの福祉の世界に何も知らずに入ってきた人なら、この表だけでも支援の段階や自分たちの現在の保護者との距離はどのようなものなのか感じることはできるのではないかと思う。

そして何より保護者支援の理想とは、保護者の自立であると思う。支援が必要だからといって、私たち指導員がその人の一生を支えられるわけではない。いつかは指導員の手から離れ、社会へと出ていかなければならない。それまでに、社会性を養い、いかに自立していくか私たち指導員は考えて、保護者との関係を築いていき、関わっていけないと思う。このように、目の前の家庭の問題を解決するだけでなく、目指すべき目的や理想に向かい、指導員同士で話し合い、保護者の方と接していく大切なのは、私自身この研究を通して改めて感じた事が出来ました。

この表を覚えておけば、保護者支援で悩むことはない。というわけにはいかないが、私たちが今まで悩み経験したことが、これから福祉の世界を目指す人達や、今まさに悩み、葛藤している人たちの力になればと思う。

文責 長居子どもの家 川畠 亮輔

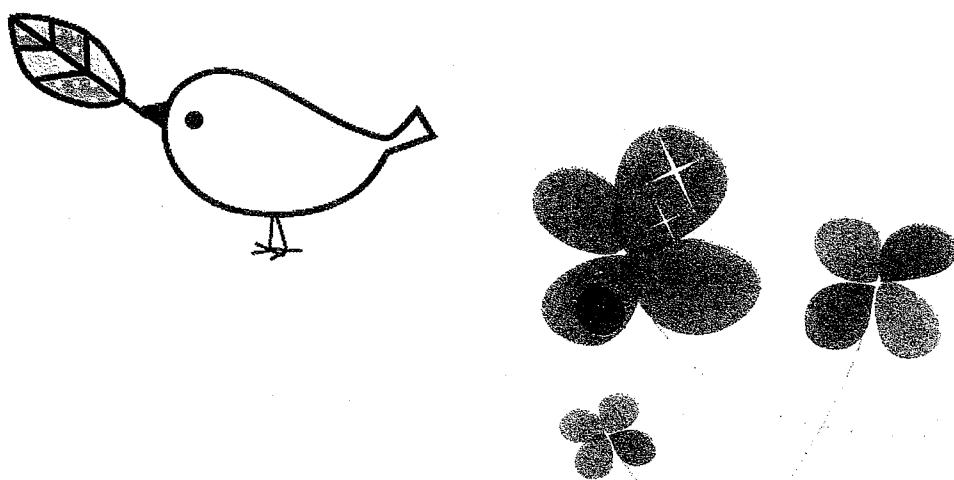
研究活動テーマ 「保護者支援」

子どもたちの豊かな生活・成長について考える上で“保護者支援”は欠かせないものだと考える。何故なら保護者の豊か（就労保障や生活の安定なども含む）の先に子どもの安心・心の安定があり、放課後が充実した時間に繋がっていくと考えるからである。

では偏に“保護者支援”と言うがどういったものがあるのだろうか。

地域の子ども研究会に参加する指導員で悩みを出し合う中で、日々の保育の中で大小の違いはあるが保護者とどう信頼関係をつくっていくのか悩んでいるという声が多く上がった。保育経験年数により（1・2年目の職員と10年以上勤めている職員とでは）保護者側も受け止め方が違うだろうし職員側も配慮の違いが出てくるだろう。しかし経験年数の課題は時間とともに変化し、積み上げていく中で保育者自身の糧となる課題である。

では男性指導員と女性指導員とでは、保護者に対しての支援方法や配慮の仕方に違いがあるのではないか？と考え今研究活動では“男性指導員チーム”と“女性指導員チーム”とのグループに分け、研究活動に取り組んだ。



2学期 研究活動

あそびと育ち～あそぶ経験が子どもを育てる～

【研究活動メンバー】

多賀井潤一郎（今池子どもの家）大山彬子（長居子どもの家）谷川勝敏（平和の子子どもの家）大川亜樹（阿さひ保育園つくし会）星里真衣（愛染橋児童館学童クラブ）藤原由佳子（都島児童館）舟島直樹（四貫島友隣館子どもの家）坂本晴佳（やまと保育園子どもの家）

【研究テーマ】

あそびと育ち～あそぶ経験が子どもを育てる～

【経緯】

「あそびと育ち」についてフリートークでディスカッションをおこなう。各施設の指導員が日々子どもたちと関わる中で、あそびが子どもたちの成長をサポートするのに大きな影響を与えていているのではないかと仮説を立て、各施設の子どもたちの中でおこなわれているあそびの事例を挙げ、そのあそびの中でどのような力が養われているのかを検証するとともに、育ってほしい力を身につけるためには、指導員がどのような立場で、どのように関わっていけばよいのかについて研究を進める。

【指導員の考える、あそびを通して育てたい力とは？】

- ・集中力・達成感・協調性
- ・自分の思いを伝える力
- ・思いやりの力
- ・身体を動かす力
- ・自己肯定感

などが指導員の考えるあそびを通して身につけてほしい力であった。

子ども達にとってあそびとは生活の中で大部分を占めものである。あそびの中で子ども達は同年代や異年齢の友人、大人など様々な人と関わり人間関係や将来社会に出てから必要な力を学び身に付けていく。同じ学年の子ども達でも、流行っているアニメのキャラクターを使ったあそびや、球技あそび、オリジナルで考え作りだしたあそびなど、各施設によっても様々なあそびがある。また、あそびについて話し合いを進めていく中で、施設でのあそびの中に指導員から提供されるあそびと子ども達が自発的に始めた遊びに分類され

ることが分かった。

そこで、各施設日々の生活の中でどのような遊びがおこなわれているのか出し合い、一部の遊びを事例として挙げその中で、指導員の考える育てたい力がどの遊びで養われているのかを表にあらわしてみた。

【指導員の考える遊びを通して育ててほしい力】

		集中力	自分の思いを伝える力	達成感	協調性	思いやりの力	身体を動かす力
風船バレー	仕				○	○	○
動物将棋	仕	○					
球技遊び	仕・自			○	○	○	○
ごっこ遊び	自		○		○	○	
サイン下さ いゲーム	仕		○		○		
バナナ鬼	仕				○		○
紙ちぎりの ぱし	仕	○		○			
室内かくれ んぼ	自	○					○
どいて下さ いゲーム	仕		○		○		○

※(自)→自発的に始まった遊び (仕)→指導員の意図によって仕掛けられた遊び

しかし、研究を進めていく中で、指導員が仕掛けたねらいは必ずしも個人の発達や、子どもの成長に焦点を置いて提供している遊びだけではないのではという気付きがあった。遊びを通して自己肯定感や相手を思いやる力を身につけてほしいという指導員の思いやねがいはあるだろうが実際の各施設で日々行われている遊びの中では、

- ・限られた環境や状況に合わせるため
- ・「暇だ」「飽きた」と言っている子どものへの提供
- ・行事に向けての誘い掛けとして
- ・施設内での交流を目的として
- ・色々な遊びに触れ、興味を持ってもらうため
- ・延長保育時など、少人数時での特別感。さみしさを感じさせないような配慮として

というねらいのもと提供された遊びが多いのではないだろうか。

各施設での生活の中で、大切なことは子どもが毎日楽しく過ごすことであり、その中にあそびが存在する。その為には、上記で述べたねらいが重視される。また、あそびをかえりみる中で、子ども達にとって「どのような力が発揮されているのか」「どのような力が不足し、育ってほしいのか」を突き詰めたいという思いに至った。そこで各施設挙げたあそびの中から自発的に始まったあそびと指導員が仕掛け、始まったあそびに注目することで、養われている力と育ってほしい力が見えてくるのではないだろうか。

そこで、各施設で継続して行われているあそびの事例を挙げて考察する。

天下一武道会

《始まり》

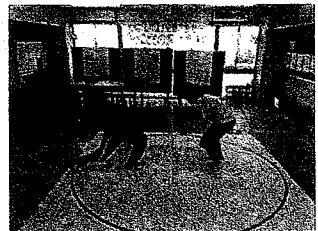
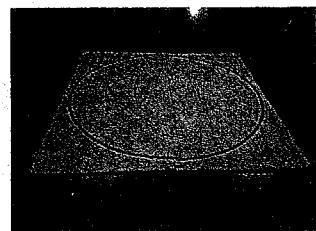
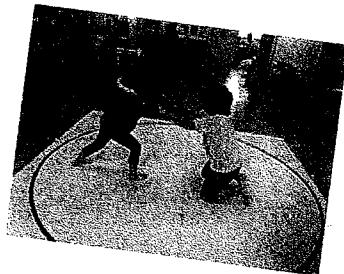
指導員が仕掛けたあそび

《対象児》

性別に関係なく、施設を利用する子どもから大人まで

《あそびのルール・内容》

- ・マットを2枚並べて1辺が3m程度の正方形の会場を設ける。
- ・トーナメントやリーグ戦で決定した対戦相手と1対1で戦う。
- ・レスリング風に押したり引いたりしながら、マットの上から完全に体が出ると負け。
- ・叩く蹴る行為は禁止。



《始めたきっかけ・指導員の思いや意図・あそびから得られる効果》

- ・始めたきっかけは、新しい遊びを提供して、その場に居た全員で取り組む楽しさを味わえるようにしたかったから。
 - ・室内であっても体を動かして、とにかくみんなで夢中になって遊びたいと思ったから。
 - ・天下一武道会が登場するドラゴンボールが流行っているから。
 - ・退屈してそうな子どもに対する遊び提供をしたかったから。
 - ・運動系の遊びを通してスキンシップを図りたかったから。
 - ・人間関係の構築（個別のねらい）を優先した取り組みをしたかったから。
- ※個別対応のねらい⇒運動不足解消、人間関係の構築、ストレス発散など
- ・あそび自体は何でも良かったが、人が集まり明確な枠があればできるので準備に時間を掛けなくても、すぐにみんなで楽しめる。片付けも簡単。

- ・周囲の仲間が見守る中で1対1で勝負することから、自己肯定感を高めたり、達成感が味わえる効果がある。

《遊びを提供してから3年目》

- ・男児を中心に遊びに携わった初期のメンバーが集まると、自然発的に始まる。
- ・ルールが単純明快なので、指導員が仲立ちをしなくても異年齢児交流が実現する遊びの一つとして子ども同士で自発的に行われている。

カードゲーム大会

《始まり》

自発的なあそびを子どもと一緒に拡大



《対象》

2年生から6年生までの男児

《始めたきっかけ・指導員の思いや意図・あそびから得られる効果》

カードバトル(バトルスピリッツ)が好きな男子と一緒にイベントを企画。トーナメント表を家で作ってき、当日の進めかたについて一緒に話をした。大会のためにいろいろな人とバトルしたり、ルール上で分からぬことを高学年に聞いたりと異年齢との関係づくりにもつながる。

マフラー・ミサンガ作り

《始まり》

指導員の意図的な提供



《対象児》

1年から6年生女児

《始めたきっかけ・指導員の思いや意図・あそびから得られる効果》

いろいろなあそびに触れ、興味を持ってもらいたいと思ったのがきっかけであり、まず指導員が作ったものを身に着けるようにした。それを見て子ども達が興味を持ち「わたしも作りたい」と言う声があがり、あそびが始まった。マフラー作りもミサンガ作りも簡単に出来る編み方から始め、個々に合わせて徐々に難度を上げていった。完成まで時間がかかるので、集中力がもたない子や思うように編めなくて投げやりになる子もいた。「作りたいけどめんどうくさい」との声もあったが、何度も挑戦する子は自分なりの楽しみ方を見つけた様で「今度は違う色で作りたい」「違う編み方したい」「プレゼントしたい」「何か作りたい」という気持ちで作っている。自分の思った通りに作れた満足感や完成した時の達成感を味わい、どんどん上達し細かい手作業が好きになっていく姿が見られるようになった。好きなこと、得意なことができる、増えることは個々の育ちに大切な自信につながる。

新聞紙の野球

《始まり》

指導員の意図的な提供

《対象》

この時（10月初旬のある日）は男の子を想定

《内容》

- ・新聞紙を丸めて布テープで巻いただけの簡単なボールとバットを指導員が用意。また新聞紙でホームベースも作ったところ、すぐに「野球やるわ！」と男児が屋上に出ようとした。指導員が新聞紙を折りながらグローブを作る姿を意図的に見せると、3～4名（2～4年生男児）が加わり共に作る。バット、グローブ、ベースが完成すると屋上で野球が始まった。破れたら布テープで補強したり、新たに作ったりして1時間ほど楽しんだ様子。

《始まったきっかけ・指導員の思いや意図・あそびから得られる効果》

・何か変わったあそびのネタはないか？と考えていた時に、指導員自身が小学校の頃にあそびを思い出したことが始めたきっかけである。（前日にグローブの折り方を覚えている自分を確認できた）

- ・「身近な材料」「費用がほとんどかからない」「忘れられていた古のあそびの提供」を意識して提供。
- ・未体験という新鮮さが子どもたちを引き付けるだろうと想定していた。グローブの折り方得意気に1年生に教える姿がみられたことがささやかな収穫であった。
- ・あそびを提供してからは、1週間ほど熱中していたが、自然消滅。しかし、新聞紙は施設内に常備している。「新聞使っていい？」と言って、紙鉄砲を作る子どもや大きなボールにする子どもがあり、新聞紙はあそびの材料として定着している。



レゴブロック

《始まり》

自発的に始まったあそび



《対象児》

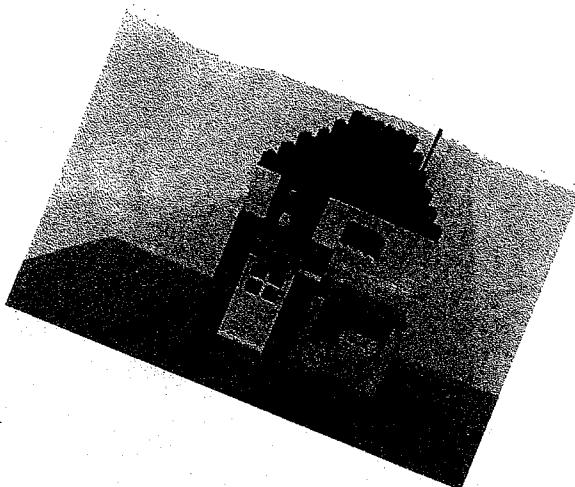
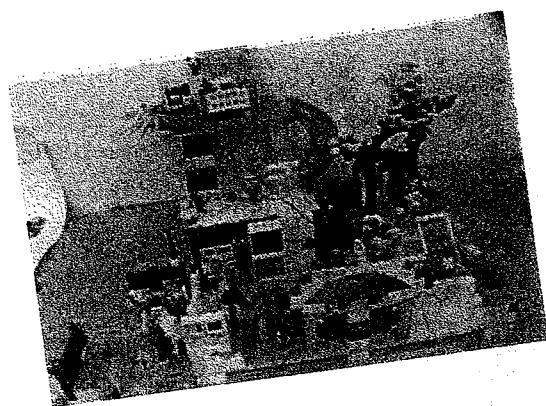
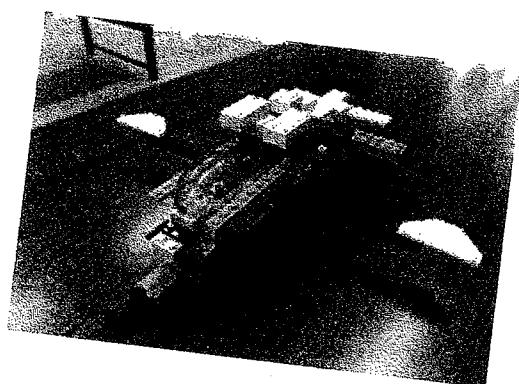
1年生から6年男女

《始まったきっかけ・指導員の思いや意図・あそびから得られる効果》

一人でも、友達同士でもあそぶことができ、レゴには様々な形や色のブロックがあるので何通りもの組み合わせが楽しめ、あそびの幅が広がる。また、作ったものを作りとて飾っておくことができ、自分の作ったものを他者に見てもらうことで作った本人にとっては自信や自己肯定感を高め、他者にとっては仲間の知らなかった一面を知り認めることが出来る機会につながる。

・A（2年生男児）レゴブロックで家を作つてあそぶことがすごく好きで、作る作品はあそびだした当初よりも徐々にレベルの上がったものに変化していっている。本児の新たなる得意分野の発見であり、

周りの子どもたちからも「すごい！」とほめられる機会が増えた。



【ドラゴンボールゲーム】

《始まり》

指導員の意図的な提供

《対象児》

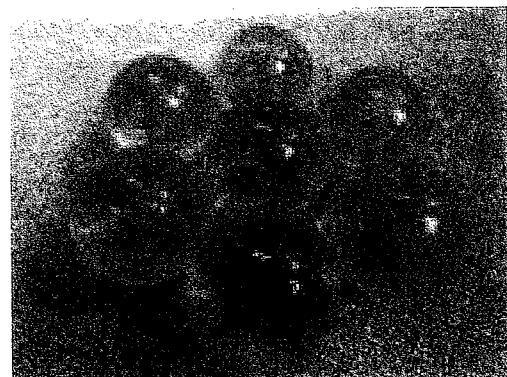
1～3年生の男の子が中心

《内容》

制限時間内に部屋の中に隠した宝を見つける。子ども達の中で流行っているアニメ“ドラゴンボール”から、スーパー・ボールをドラゴンボールに見立て部屋中に隠し、探して集める遊び。早く7個集めた人が勝ち。ドラゴンボールを持っている相手とジャンケンをして勝つと相手からドラゴンボールを奪える。

《始まったきっかけ・指導員の思いや意図・遊びから得られる効果》

3年生の男の子に1～2年生が付いていく流れがあり、3年生の男の子が飽きてしまうと遊びが終わってしまうことがある。そこで、子どもと一緒に宝の地図（ドラゴンレーダー）を作ったり、じゃんけんの方法をドラゴンボールに出てくる技の名前（ポーズも含む）に変更したりして、遊びが持続するように工夫している。また、子ども自身で新しいルールを作っていくことであそびの広がりが見られる。あそびが仲間づくりのきっかけとなるよう、子ども達同士の共有できるものを使い、仲間づくりの輪に入りやすくする。



ままごと・お店屋さんごっこ

《始まり》

指導員の意図的な提供

《対象》

年齢、性別問わず。

《始まったきっかけ・指導員の思いや意図・あそびから得られる効果》

指導員。頂き物で、ままごとをたくさんもらう。指導員自身、ごっこあそびが好きということもあり、少し学童児には幼いかなと感じながらも、ままごとを提供する。

新しい玩具ということもあり、低学年中心にあそびが盛り上がったが、あまり長続きすることはなかった。ある日、高学年女子が低学年と一緒にお店屋さんごっこ(バイキング屋さん)を始める。高学年が設定やルールを決めることで、あそびも盛り上がり、楽しむ姿が見られた。そこに指導員も一緒に入ることで、「次の日もやりたい」という声も聞かれる。

何度か繰り返しあそぶ中で、お店屋さんごっこが盛り上がり、店員役とお客さん役であそぶ姿が多くなる。そこで、次の日も継続して楽しめるように、メニューを作りファイルに綴じたり、お金を作ったり、プラスチックケースを用意し、よりお店屋さんらしさを出せるようにするなどの工夫をする。部屋の一角をお店屋さんスペースとして、毎日繰り返し楽しむ姿が見られた。

保育園のバザーで学童からお店を出す時の練習に繋がれば、と思いお金の金額を50円で統一する。子どもたちからも、「バザーみたい」という声や、計算して金銭のやりとりを楽しんでいる。

役になりきる中で、普段とは違う丁寧な言葉遣いや、相手を思いやった言葉が聞かれる。その言葉使いや思いやる気持ちを、普段の生活の中でも出来るように子どもたちに返していきたい。

初めのきっかけは、特に大きな意図などはなく提供したが、子どもたちと一緒に遊んでいく中で、もっとこうしたら楽しいかな、こんなことも出来るなということが出てきた。

日々の保育の中で意図を持ってあそびを提供したり、関わったりすることももちろん大切だが、何気ない普段の遊びや関わりの中で、気付いていくことも忘れずにいたい。



秘密基地遊び

《始まり》

自発的に始まったあそび

《対象児》

1年生男児5名ほど

《あそびのルール・内容》

- 廊下の隅っこ、段ボールや掲示板などを立てかけ壁を作り基地を作る。
- 暗号やカードを使って入場規制をかけ、グループ以外の立ち入りは拒否する。
- 基地の中では主に工作（紙や段ボールを使った武器作り）をしている。
- 船に見立てる事もあり、他の部屋などを「海」として泳ぐ真似で移動して楽しむ。

《始まったきっかけ・指導員の思いや意図・あそびから得られる効果》

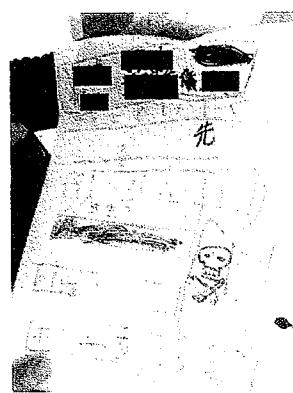
- A（男児）は、秘密基地あそびの中で船を作った際は「船長」と言われ、あそびをリードし子どもたちの中でリーダー的存在である。段ボールや紙を使った工作のアイデアが豊富で、一緒にあそんでいる周りの男児はその作品で遊ぶのが好きである。あそび以外の日々の生活の中でも指導員の注意や声かけを助けてくれる一面がある。
- B（女児）は、暴言や暴力が目立つことから同学年女子だけでなく他学年との関係にも距離がある。力加減が分からず、じゃれ合いからケンカに発展してしまうことがあるがこのあそびの中では、ケンカが起きそうになるとB自身から「ごめん」と譲るような姿がみられる。このグループを守ろうとする様子が目立つ。
- 絵が得意であるC（男児）は、入所当初は姉がいたことから年上の子や女子のグループに入ってあそぶことが多かったが、秘密基地遊びに加わるようになってからは同学年の男児とあそぶ姿が増えてきた。得意な絵で、秘密基地のリモコンや地図、操縦席などを作っている



■リーダーが作ったくじ引きで副リーダーを決める様子。



■自分たちのルール・役割をもって、基地の中で過ごす様子。



■基地に入れる仲間のリストと自分たちで決めた遊びの予定表。

【まとめ】

各施設で継続している遊びの事例をあげたところ、それぞれの遊びが継続している要因として、玩具が人数に見合った量が用意されている、遊びや玩具のもっている長所が多くある、日々継続してあそぶことが出来る、年齢問わず誰もが楽しめる簡単なルールであるなどの「物的環境」と、指導員自身がその遊びが好きで子どもの中に入って一緒にあそぶなどの「人的環境」が整っていることが大きく関係するのではないだろうか。各施設の中で流行っている遊びの事例から、“自分の作った玩具で友達があそぶ”、“自分の得意なことが遊びに反映されている”とあるが、遊びの中で得意分野が他児に認められることは自己肯定感を高めたり、自信につながる。他児にとっては「〇〇君、〇〇ちゃんってこんなことが出来るんや！すごい！」という友達の新たな一面を発見する機会にもなる。そして遊びの中で互いを知ったり、認め合ったりすることで、人間関係が培われ、指導員が間に入らなくても、自然と子ども同士であそびが始まる。そして新たな遊びへの発展へと繋がると考える。

日々の遊びの中で子ども達は成長していくために必要な力を自然と身に付けています。遊びの中で時には喧嘩をし、自分の思いを伝えたり、相手の気持ちを知ったりして仲を深めていく。様々な遊びが子どもたちを成長させる。最近ゲーム機を使った遊びが流れており、人と人との関わりが減ってきてている中で、私たち指導員は自分自身が子どもの頃に経験してきた遊びを現在の子どもに伝えていく必要がある。そして私たち自身も、子どもとの遊びの中で、個人の成長を発見し一人ひとりに見合った支援の方法を身に付けていきたい。

文責：やまと保育園子どもの家 坂本晴佳

学童保育の役割とは ～OB・OG 座談会から子どもの気持ちを紐解く～

I. 問題と目的

放課後児童支援員認定資格研修が今年度から行われるようになり、この先 5 年で約 3500 人の認定有資格者を目指すと言われている。今までの指導員という役割とは違い、より専門性のある支援員が必要になってきているとも言える。

支援員に求められることは、経験だけではなく専門的な子どもの成長・発達を理解した上での対応が求められてきている。そのため、当「地域の子ども研究会」でも現在、学童に通う子どもたちと関わる中で、支援員の関わり方やその対応が子どもに即したものであるか、検証する時期にきていていると考えた。

本研究の目的は、現在の子どもからの聞き取り等ではなく、1 年生から 6 年生までの時期を学童で過ごした OB・OG の高校生・大学生という振り返りができる年齢の子どもたちに対し、様々な質問を通して座談会という自由な発言の場を通して検証していくことである。

II. 方法

(1) 調査対象

大阪府下の「学童クラブ」「子どもの家」を利用していた 4 施設の高校生・大学生までの男女 7 名を対象とした。

(2) 調査方法

調査方法は、いくつかの質問を支援員が準備し「座談会」という形式で自由に発言する場を設け、文字おこしを後日行い検証した。

(3) 調査時期

2016 年 1 月 17 日（日）

(4) 調査内容

「座談会」を後日文字におこし、参加者の発言からその当時の子どもの心理を読み取り検証していく。今回の「座談会」は、支援員からの誘導質問にならないよう、どのような発言でも構わないということを参加者に予め伝えた上で、学童保育が優位という発言にならないようにした。

高校生・大学生 OB・OG 座談会

2016年1月17日 セツルの家にて 13:00~14:00

司会 指導員 長1： 長2： や1： や2： 育1： 育2： 今1：

(1) 今学童期に戻ったら また行きたいか、もう行きたくないか？学童の存在とは

司会：自分が今、学童に戻ったら、小学生に戻ったらまた学童に行きたいですか。理由も教えてほしいです。

長1：行きたくない。（理由）行動がかなり制限されるから。

司会：それは普段学校から帰っての生活が制限されるから？例えば外に遊びに行きたいのに行かれへんとか？

長2：もう全てが。面倒くさい。（理由）学童まで行く道が面倒くさい。

長指：何人かで帰るんじゃなくて、彼1人で学校から15分くらいの距離だったので。

司会：なるほど。そしたら自分が大人になって子どもができたら、学童に行かせる？子どもが行きたいって言ったらどうする？

長1：行かせる。（理由）行きたいって言ったから

長2：行かせる

司会：じゃあ他に“行きたい”って人が5人いてるんですが。友だちと遊べると書いてあるんですがそれは学校とは違う友だちがいるから？

や2：普通に勉強せんでも遊べる。宿題はせなあかんけど、お迎えくるまでずっと遊べるから。家におっても勉強しとけて言われるから

司会：なるほど。家におるだけやったら楽しくない？

や1：家におっても行かれへんところに行けるし、連れてってくれるから

司会：遠足とかあるからね。じゃあ学校でできない遊びを教えてくれるから？どんな遊びが面白かった？

育2：Sケンとか大将とか、あとは新しい遊びを自分たちでつくったりした。

司会：“自分”でできたから？

今1：遊び方も教えてくれるし、兄ちゃんとか下の子とかもおるから、関わり方も学んだし、周りみて考えるってことも学んだから、今の自分があるのは学童があったからって思ってるから、行きたいって思ってる

司会：いきいきも皆学校にあったと思うんやけど、いきいきじゃなくてわざわざ学童に来る。特に（前の質問で）「行きたい」って言ってくれた子は、いきいきへ行く事の選択もあったはず。いきいきでの楽しさもあったやろうし。いきいきと学童の違いは？（いきいきに行っていた）友達の話や自分の体験を教えて。

育2：ちょっとだけ（いきいきに）行ってた。

司会：いきいきに行って「合わない」と思って止めた？

育2：うん。外（校庭）で遊ぶ時間が決まってるし、講堂とかへ行っても30分だけとか（しか遊べない）。学童では外へ行きたい時に行けるし、部屋の中に居たかったら居られる。自己選択できる。

育1：私は一回だけ行った事がある。でも楽しくなかったから止めた。

司会：それは！学童に居て、（その後）いきいきに行ってみたら面白くなかったって事？

育1：うん。

や1：私は行った事ない。

司会：お父さん・お母さんに「行かんで良い」って言われたとか？

や1：そんな事もないけど。

司会：じゃあいきいきに行きたいって思ったことは？

や1：ない。あんまり楽しくないって友達から聞いたから。

や2：私はずっと行ってた。6年間の途中まではいきいきで宿題をしてから、学童に行っていた。

や1：だから学童に来るのが遅かったんちゃうん？

や2：そうそう。いきいきでクラスの違う（学童へ通う）友達と待ち合わせして、集まってから学童に行ってた。

司会：じゃあいきいき行って、学童で19時までお迎え待ってたん？

や2：うん。

司会：いきいきと学童の雰囲気全然違う？

や2：いや、そんな変わらへん。

司会：そんなにいきいきが嫌じゃなかんたんやね？

や2：うん。

今1：いきいきは時間が短いってのもあるけど、なんか体験みたいなやつに一回行った。その時に学童は家みたいって思った。服（制服から私服に）着がえて、居心地も良かつたし。

司会：皆は学童で（制服から私服に）着がえてた？

や1・や2・育2・育1：（制服はなく）私服だった。

司会：長1・長2はいきいきどうでしたか？

長2・長1：いきいきへ行ってない。

（2）指導員からのかかわり等で嬉しかったこと・嫌だったこと支援員とのかかわり

司会：今からは（O Bの子たちに質問する施設の指導員は耳を塞いでいてください。やまととのO Bに聞くので、そのや指導員耳塞いでおいて。指導員の時に一番うっとおしかった事を今から教えてくれる？

や1：待って、思い出されへん。

や2：うち、めっちゃあんねんけど。

司会：たぶん子どもの家っていいたら第2の家とか（言われてる）。お父さんお母さんとか、お兄さんお姉さんみたいな存在に・・・そんな存在やと思うんやけど近いからこそ、鬱陶しい事とかあるやん、やっぱり。

や2：すぐに指導員がキレる。

や1：それはある。

や2：何か、ドッジボール部とかあったのに廃部にした。

司会：何で？子ども達が何かやらかしたん？

や2：え、覚えてない。無くなって「は？何やねん」ってずっと思ってた。

司会：他は？

や1：何かあった？あまり記憶はない。

司会：じゃあ反対に嬉しかった事は？

や1：ないないない。

司会：“何々されて嬉しかった”とか“こう言ってもらって凄い心に残ってる”とか。

や2：指導員に誕生日でサプライズした時に泣きかけてた。

や1：あれは嬉しかったなー。

司会：それって彼がされてる事じゃない？

指導員0：喜んでくれて嬉しかった的な感じ？

司会：自分たちがしてもらって嬉しかった事やで。

や2：してもらって？ないなー。

や1：普通じゃない？やってもらった全部。

司会：手が掛かる指導員や。心配になるような。やまとOBの子たちの話面白かったよ。育徳OBの子たちいこうか。

司会：腹立った事何かある？

育2：ない。

育1：友だちとケンカした時に私だけ怒られた。1対何人（多勢）かのケンカで（私は多勢の方だった）。私だけ怒られた。他の皆（多勢の子たち）は何も言われない。その差別は何なんって思った。

司会：今だに恨んでるん？

育1：うん。

司会：さっき「ない」って言ってた育2さん、他の先生には？T指導員とかY指導員とか、M指導員とか他にも先生（育徳指導員）おったと思うけど。

育2：うっとおしい事はないなー。

育1：変なところがマメ。

育2：あー、うん！Tさんやろ。

司会：じゃあ嬉しかった事は？めっちゃ感動したとか、やってもらって良かったとか。

育1：キャンプの時とかは6年だけ特別（プログラム）とか。そんなんはあった。

育2：特に！とかは無いなー。

育指：一個思い当たることはあります。

司会：後で車で聞いて下さいね。

今1：私の関わった指導員は前任の今川指導員とS先生（現任の今川指導員）で、前の先生は2年くらい（1・2年生の時）。前の先生の時は学童もケンカとかが一杯で荒れてるって感じだった。その時の別の女の先生もかかわりにムラがあったし、それは嫌だなーと思っていた。

先生が変わった時に、新しい先生だからこっち（子ども側）も知らないし、わからないから“何こいつ？”みたいな態度取ってる時に、お互い心が通じ合ってない・近くない時にいきなりキレられて、私たちも悪かったんだけどおちよくってた。今になって思えば（悪いって）解ってるけど、その時はそれが悪い事（発言や行動）だと思ってなくて。なのに急に「自分ら何やねん」ってキレられて。子ども側からするといきなり学童指導員として来て、いきなりキレられてそれが何か「うっとおしいな」って印象に残ってる。それ以外はあまり先生に対して嫌やなとかではなくて。嬉しかった事とかは、まず全力で一緒に遊んでくれる事。キックベースとかしても、子どもより一番先生が「わーっ！」と行くからその後に私たち（子ども達）が「わーっ！」ってなれた。だからすごい楽しかった。一つ一つ全力だった事が嬉しかった。でもその時には気付いてなくて、中学生・OGとして誘ってくれて、参加してる内にそういうことに気付きました。

司会：怒り方がその当時粗雑だった。

今1：そう。すごいこの先生何やねんって思った。絶対嫌やって。

司会：今までこそ怒る事も全く無くなりましたけど。

今1：凄かったですよ、荒れようが。

司会・今1：お互いね、荒れてたからね。

司会：ありがとうございます。

（3）大地協合同行事について 他施設の子ども同士の交流

司会：合同行事があったと思いますが、ともだち運動会、ドッジボール大会、将棋、けん玉大会とかあったと思います。今年からともだち運動会が変

わりともだちフェスティバルなくなったのは知ってる？運動会がなくなってしまった。色々な行事があったけど、参加してよかったか、極端な話なくてもよかったか、どっちでもいいとかも含め書いてください。

付箋記入

司会：友だちになれた？

育1：なんか連絡先とかは交換せんかったけど、あったら「おー」みたいな。

司会：顔知ってるみたいな感じ？覚えてるところはどの辺？

育1：中学一緒やったりとか、全然違う学童の子でも中学一緒になって、「あの学童の子や」みたいな

司会：それはどの行事が一番？ドッジ？四大行事の中で？ドッジボール？

育1：うん

司会：ありがとう。たとえばドッジボール大会負けて泣いたとかある？

や2：ある。めっちゃ泣いてた。当たって泣いてた。痛くてとかじゃなくて悔しくて。

司会：具体的なライバルという存在によって改めて団結した感じ？

今1：なんやろ、友だちできるけど、友だちには壁があつてライバル、敵やつたから敵やと思ってたからだからこそ、なんかドッジボールの前とかなったら本間にみんなでドッジボール大会に向けてみんながわーと迎える初めての行事前やったから本間に敵としてしか見てなかつた。だからこそそういう行事がって学童ならではの行事やと思うから、ドッジボール練習したりとかだからあってよかった。

司会：それはドッジボールだけ？運動会とかは？

今1：運動会とか全部が敵やつた

司会：敵やと思った人？

や1：仲良くなろうと思わんかった

司会：仲良くなろうと思わんかった？もー倒すぞって？

今1：あっちもそう思ってると思ってたから。

司会：あっちってどこをゆうてる？

今1：全部！

司会：全部の12施設、ほかの施設？

今1：うん！

司会：どこが一番とかある？

今1：育徳とか、望之門

司会：敵って思ってた？

長1：他の施設？うん。

司会：倒したいとか？

長2：別に倒したいとかじゃない。どうでもいい。

司会：ほんまー。敵かー

今1：敵や！

司会：あんま敵とかゆうなって。笑 次【よかったです。他の学童の子と仲良くなれた。】仲良くなれた？

育2：うん

司会：どんな感じで仲良くなれた？僕らあんま知らないから

育2：なんか運動会とかやつたら、競技始まる前に横の子しゃべったりしてた。

司会：ワークとかやつたら？四大行事以外のワークキャンプとかあったけど

指導員K：山の家のワークキャンプ、川下りとか

司会：あった？

指導員K：ありましたありました。行ってた？

育2：行ってなかった。

司会：そのしゃべってたりしたってゆうのは覚えてる？

育2：うん

司会：今の友だちとかではその子おる？

育2：うん

司会：あ、おるんや。え、どこ？

指導員K：N学童クラブとか

育2：そう、～（名前）って子

指導員O：あ、～（名前）へー

育2：あと～（名前）って子

指導員O：～（名前）この前来てた

司会：それはその時知り合って覚えてたんや？

育2：顔見たことあるなって思ってたら、中学で一緒になった。

司会：N学童クラブの子やろとか！子どもの家の子やろとか？

育2：うん

司会：それいいなー 次、【違う施設の子と戦って勝ってうれしい。】これまた
敵や。笑 負けた時泣いてた？

や1：泣いてはない。

司会：これもドッジの話？スウェーデンとか大縄とか？

育1：大縄かな。めちゃ練習してたから。

司会：どこに負けた？

育1：覚えてないなー

育2：さっき言ったのがそれが原因やった。喧嘩がそれの元やった。

指導員K：8の字が元やった。

司会：それで理不尽に怒ったんや？

指導員 K：理不尽って両方にめっちゃしゃべってたのに！理不尽ってゆうてたんですか？

育2：あれはおかしかったよな。

司会：これをなんで書いてもらったかっていうと、やっぱり、いま学童に来る子、みんなの後輩にあたると思うんですが、やっぱり楽しくないと来ないやろうし、その時はなんか悔しいし、それこそ敵やなーと思ってるかもしらへんけど、今になって振り返った時にそういう気持ちを体験できてよかったかなと思っているので、これからまたここにいる指導員がいろいろな行事考えますけど、またこれもひとつ参考になりそうやなと思って聞かせてもらいました。

(4) 学童での遊び 遊びを通しての育ち

司会：学童の時にやってた遊びで自分がすごい楽しかった遊びを何個でもいいので思い浮かぶだけ書いてもらっていいですか。

司会：お化け屋敷ってなんなん？

や2・や1：自分たちで真っ暗な部屋で卓球台の裏に隠れて出てきたり、髪の長い子にお化けやってもらって低学年とかを驚かすねん。

司会：あー、驚かすん。

や2：そう。

司会：泣く子おった？それ自分らもやってもらってたん？先輩らに。

や2：そうそう。

司会：じゃあ、それ伝統なん？

や1：あんま覚えてない。

や2：Mちゃんとかさ・・・

や1：あー、やってた。

育1：エスケンと大将と卓球とさんぽとテニスといりきと壁あてと指令所。

司会：指令所って？

育1：なんか夏休みの時に高学年は外の出れるから、紙にいっぱい指令書でもらってそれをやりに行く。

指導員 K：施設の外でこれしてこいってやつか。

育1：そうそう。

司会：一番覚えてるこれきついなって思ったこと教えてもらっていい？

育1：白の鳩！白の鳩を見つけること（笑）

司会：それできたん？

育1：できてないなあ。おらんもん。

指導員 K：犬の名前聞いてこいとかなあ！

司会：それはグループで？

育1：そう。

育1：なんか、おばあちゃんの荷物を持って帰つてくるとか。

司会：それやつたことあるん？

育1：ある。

司会：その時、おばあちゃんになんやねんとか言われへんかったん？

育1：大丈夫ですかって声かけて、さりげなく荷物を持って一緒におばあちゃんの家まで行った。

司会：すごいなあ！他に違うのはある？

育1：さんぽとドッジが合体したやつ。

司会：長居は？

長1：卓球・カロミン。

司会：カロミンって？

長指：ビリヤードみたいな四角い台で、赤と緑に分かれて1-9数字を順に落として最後は共通の二重丸のを落としたら勝ちのゲームです。

司会：それはおもちゃ？

長指：おもちゃです。なんか全国大会とかもあるみたいです。

司会：他は？

長2：一人で読書してる時が一番幸せでした。

司会：何読んでたん？漫画？

長2：忘きました。

司会：長居って漫画あったっけ？

長指：本棚1個分だけ。

や2：漫画禁止やつたやんな？

や指：経緯があって、うちは俺が来るまでカードゲームしかしない子とか、本棚の下で本を読んでたまってたり・・・皆でおる意味がないから俺が来た時にぜんぶやめた。で、漫画がないなかでいろいろみんなで遊び始めて天下が一番早く浸透し遊びやねん。

司会：室内で遊ぶ時はなにで遊ぶん？

や指：室内ではゲームするというか、うちはお化け屋敷もそうやし、ゲームじゃないねんなあ。

司会：梅雨とかになると室内であそばないとしゃーないやん？その時はずっとお化け屋敷？（笑）

や指：お化け屋敷してる時は結構長い時間してるし、木を切つて遊んだり、火をつけてあそんだり、なんかそういう感じ。ゲームになじまれへん子もお

るから、そういう子らはそうやって遊んだりもしてた。

司会：合ってる？嘘ついてへん？

や指：亀のさんぽとかな。あと何してたかなー。カプラで大きい家をつくった
り。

や2：なんかちゃんとしたゲームとかがない。

や指：名前のあるあそびじゃないねんな！なんとなく広がっていく遊びやから。

司会：今も漫画はないん？

や指：ない。文庫本はある。

や1：やまとスイッチとかやってたよなあ。

や指：うううう。ピタゴラスイッチみたいなやつな。YouTubeにのせたもん。

司会：再生回数はどうやった？

や指：わからんけど、俺が何回も見てるから自分で回数増やしてる感じかな。(笑)

司会：次は。

今1：みんなが言ってるのと、室内ではコマ回し、大富豪。トランプ系と肝試
しと・・・蟻地獄も流行ってた。滑り台の上に捕まって下から引っ張ら
れるだけの永遠続く遊び。

司会：靴が取れたとかどうのこうのでもめるねん。

今1：探偵とかタッチ隠れ。

や2：竹馬とかもやったな。

や1：うんうん

今1：一輪車とか泥団子もしたな。

司会：泥団子な。

(5) 運動会前日、赤白帽子のゴム 指導員として求められること

司会：最後の質問です。運動会、仮想の話で、次の日小学校で運動会があります。必ず赤白帽を持っていかなかんかかったはずなんですけれども。学童に持って帰って、それから家に帰って学校に行くけれど、学童に帰つたら帽子のゴムが切れていきました。基本的に学校の運動会って、今もそろなんですが、ゴムがちゃんとついてないと先生に叱られたり、ちゃんとつけてきてくださいって言われる。2つのパターンが学童やつたらあると思うんです。家に帰ってお家の人につけてもらうか、もしくは学童の先生にその場で急いでつけてもらって安心していくのか。自分やつたらどっちがいいのか素直に書いてもらいたい。家で親につけてもらうか、(学童の)先生につけてもらうか。直るのは直る、結果は同じだけど自分だったらどっちが自分としては満足するか、安心するか書いてもらいたい。

今1：自分ではあんまり言われへんかったから、お母さん忙しいし。それやつたら先生の方が言いやすかったし。先生に直してもらったら、何も言わずにすむからその方がいいなと思って。

や2：家。心配やから。

司会：指導員が付けれんのかなってこと？

や2：そうそう。あと、自分で家に帰って自分でする方が安心。自分でもし失敗しても自分のことやから許せる。人に失敗されたら「はあ？」ってなる

司会：それは親に言わなくて、自分でできるってこと？

や2：言ってから、「自分で直すわ」って言って

司会：自分でするってこと、どこかで心配せんでいいでってことじゃないの？忙しいし。

や2：お母さん裁縫できへんし、うちとお父さんしかできへんから。お父さん家に帰ってくるの遅いから、絶対うちがする。

や1：学童。すぐに直せるなら直したい

司会：それは忘れそうだから？

や1：それもあるけど、任せた方が楽やから。

司会：家で言いにくいとかではないの？家でもかまわへん？

や1：うん。

育1：家かえってから子どもの家におる時以外でなったら家で

司会：そういう風に教えられてたん？（笑）

育1：いや、普通に学校とかで切れても、一回子どもの家に行くけど、いつも親に直してもらってるから、いつ切れてもまた親に頼む。

育2：家でつける

司会：先生には言い辛い？

育2：うん。厚かましくない？切れて、つけてーってよう言わん。

指導員0：学童で切れても？

育2：うん。

司会：学校で切れても？

育2：うん。

司会：気い使いやね。言うたったらいいのに。

育1：1回言ったら、自分でやりって

育指：針とかは持ってくるけど

育2：誰かの直してるの見たことない。

育指：結構ゴムとか直してるけど…

育2：ふーん

長指：先生がやってくれない。

司会：自分でやれって言われるん？

長2：いや家でやってもらいたいって。忘れたら貸出あるし、俺はほぼほぼ赤白帽
なんて付けていなかったんで

司会：いろんな意見が出たんですけれど、何でこれを聞いたかと言うと、30年前に倉光先生が園長とかではなくて、今ここに座っているような感じの指導員だった時に、その話を指導員だけでされているんです。服のボタンがとれた時につけてあげるのか、家でつけてもらった方がいいのかという話を、当時ここで話をしています。今年度僕らもその話を30年ぶりに同じ話の同じ内容で同じようにさせてもらいました。意見が分かれてて、お父さんお母さんにやってもらった方がいろんな愛情をもらってるんじゃないかという意見や、いやいや学童は第2の家というからかこそそういうことをやった方がいいんじゃないかとたくさんの意見が出て、じゃあ実際に子どもとしての意見はどういう気持ちなのかなと、今回聞きたくてこんな質問をさせてもらいました。

でも、いろんな意見がでてきて、指導員に気を使っているところもあれば、お父さん・お母さんに反対に気使ったりとか。そういう気持ちだったんだと、少人数ですけど、勉強になるというか、そういう考え方があるんだなというのが新しい学びになりました。

前半から後半まで1時間ほどいろいろな質問をさせてもらったのですが、やっぱり学童というところは、これからどの施設も続けていったり、しっかりと存続していくために、みなさんのようなOB・OGの意見も含めすごく大切な時期にきているのが事実です。今、学童に来ている子たちは自分の言葉でまだまだ幼いから言えないけど、皆さん（小学校）卒業して何年も経って経験しているので、いろんな意見を出してくれるので大変ありがたかったです。参考に1つの報告集にさせてもらいたいと思います。

III. 結果・分析及び考察

座談会を通して、OB・OGたちの活発な意見の中で、見えてくるものがあった。

(1) 今学童期に戻ったら また行きたいか、もう行きたくないか？

(2) 指導員からのかかわり等で嬉しかったこと・嫌だったこと

その質問の答えに彼、彼女たちにとって学童の存在がどのようなものだったのかを読み取るキーワードがあった。「自分で選択できる」「縦横の子どもとの関係を通して、関わり方を学び、周りをみて自分で考えることを学んだ」という言葉がでてきた。家庭において兄弟（姉妹）の関係があるがそれだけではなく、第二の家庭としての機能を果たしていることが考えられる。『中川芳一「学童保育実践入門 かかわりとふり返りを深める」かもがわ出版、2012年』によれば①養護的機能（子どもの生命・安全・健康・衛生などを護り、ひいては子どもの生活そのものを護る機能。②ケア的機能（ケアによって、生活の場を共にするものの同士が、うれしさや喜びを膨らませ、悲しさ辛さ、寂しさ、怒りを癒すこと③教育的ケア（ここではあくまで Educe=引き出すであり、子どもがもつ資質や能力を自ら獲得していくように支えること、併せて、そのための意欲を高めていくように支えること、これこそがまさに教育という営みである。）と記されている。つまり座談会の中ででてきた、自己選択・他児や支援員との関係の構築において、ケア的機能と教育的機能は果たせているものと分かる。

また、NPO法人大阪市地域福祉施設協議会加盟施設で行ってきた合同行事においても、「敵」という発言があったが、ここで言う「敵」というものは言い換えればライバルという意味が込められており、憎しみ等を含んでいないことが分かる。切磋琢磨していく中で、様々な行事においてライバル心が子どもの内面で起こっていたようである。

学童での遊びにおいては、学校等では経験していないものを体験し、楽しんでいたようである。遊びは共通のものから施設独自のものなど様々であった。しかしながら、遊びは子どもの育ちの基本となることがわかる。

最後の仮想質問においては、率直な気持ちが聞き取れた。自分でやった方が早いなど合理的な意見もあった。しかし子どもはもっとシンプルなのではないだろうか。大人（支援員）は子どもの深層心理を考えすぎている部分もある。子どもは、親でも支援員でも直してもらえるという関係があれば、相手が誰でもよいのである。言い換えれば、基本的なことだが見守る人がいればよいのである。

今後の調査課題としては、今回の座談会参加者は学童に対して比較的好意的であること。支援員と現在も関係が続いているという点においては学童優位な結果となっている。今後、途中退所した子どもや学童に馴染めずにいた子などの調査も行い、違った角度からみた学童を知る必要はある。

IV. 結論（まとめ）

地域福祉の諸問題～昭和61年度～記載・実施された指導員座談会『通所する児童のボタンを付けるか否か』の議論は当時、賛否両論で結論に至っていなかったが、第14回児童部会で「今ケースの援助は家庭でするべき役割であり、施設で担うものではない」と一定の結論が出た。

結果を導き出した指導員の考えには「子どもに他者を頼る力を付けてほしい」「母親の今後の気付き」「子ども自身がSOSを発信」「将来の保護者支援」など本児の成長過程を見据えた上での援助の視点で討議がなされたが、OBOG座談会では「自分で行なう（父が出来るが遅い・母は出来ない）」「（保護者が忙しい為）言いづらい」との子どもの声もあった（一例）。

今ケースは「帽子のゴムを施設でつけるか否か？」であり、子どもが自身で乗り越えやすいものであったが『自分では出来ない』様な出来事であった場合、保護者にどうアプローチ・支援するのか考えさせられる内容でもある。子ども自身が「他者を頼る力」を付けるのか？将来の保護者支援だと、保護者にアプローチするのか等家庭背景によって議論が尽きず、その時々考えうる子どものその後の一生を見据えた上での“最善の支援”を選んでいかなければならないだろう。その為に私たち「地域の子ども研究会」で出来る事は（その時々で考える事は勿論である）これから他の施設のケースや支援方法をより多く収集し、様々な視点からの支援方法を知識として得ておくことが出来ると考えている。

昭和61年度の指導員座談会テーマは『学童保育が家庭的な役割をどこまで担えるか？』であった、児童部会・OBOG座談会を経て家庭的な役割を担う・担わないという端的な結論ではなく、指導員からの視点・家庭背景・子どもたちからの声を聞くことが出来、様々な議論と今後更に視点を増やせる要素を頂いた内容になった。

児童部会第2部で育徳園倉光先生より
『放課後の児童を考えるには、現在の学校内での子どもたちの学習環境・生活環境から考察する必要もあると思います。（中略）その学校生活環境によっても、子ども一人ひとりの放課後は違います。（中略）家庭環境の状況を把握するのと同様に重視しなくてはなりません。

私たちは、子どもたちの置かれている家庭環境や、学校での生活環境など複合的な環境を充分に把握して、子どもたちと生活することが求められます。』とまとめの言葉をいただいた。そういう側面からも私たちは子どもたちと関わっている時間のみならず「子どもたちの24時間を、子どもたちの小学生時期6年間を、中高大学生と幼児期から中高生・保護者になるまで、連続した生活・育ち」を見据え“今”どういった支援が必要かを考えなければならない。

また、今回の研究においてどの学童保育の文献を探しても、学童期に関する

ことは詳細に書かれていても、中高大学生までを見据えたものは皆無であった。「座談会」を通して、OB・OGたちの振り返りの中で「遊び」「友達」に関することが出てきた。その中でも、顕著に子どもたちの心の中に響いていたのは「大人（支援員）とのかかわり」であることが分かった。

指導員が入れ変わる環境は昨今目まぐるしくなり、平均で約2年～3年。長くても約5年と言われている。子どもの同士の繋がりよりも、支援員とのいかに繋がるか現在の問題といつても過言ではない。その短い期間で、1年生から6年生までの様々な発達段階の子どもたちに寄り添い過ごしていくなくてはいけない支援員。小学校に慣れることで精一杯の1年生。学校にも慣れるが、まだまだ援助が必要とされる2年生。自分ということを客観視できるようになり思春期の前段階に入る3・4年生。そして思春期や反抗期に入る5～6年生の子どもたち。このような子どもたちが混在する学童保育だからこそ、支援員力というものがより重要になってくるのではないだろうか。

今回の座談会は、学童という居場所で過ごした子どもたちの成長と、粘り強く対応してきた支援員がいたからこそ、実現したのも事実である。

文責：佐藤（今川学園子どもの家）

大西（望之門学童クラブ）

吉野（阿さひ保育園つくし会）

隈本（育徳園子どもの家）

川畑（長居子どもの家）

子どもたちとの活動の報告

●第30回ともだちドッジボール大会

●ともだちフェスティバル

●第20回子ども将棋大会

●春のあそび大団

●第64回大阪市子ども卓球大会

●自然体験活動ワークキャンプ

運動会ではなく文化祭をイメージした行事にすることで、気軽に楽しめる場を強調し誰もが参加しやすい雰囲気作りを心掛けた。また、施設が一丸となって1つのことに取り組むことができたり、当日に店番をすることで他施設の子どもや指導員との新たな出会いや交流する機会ができるよう、各施設でのブースを企画・運営を行った。会場内を自由に回ることができたり、1時間おきに行なったイベントも出会いや交流の機会になったと思う。



今回最も意識した“地域”といった部分に関しては、丸山小学校を会場としてお借りできることで、今回は「地域＝小学校区」と私たちの中で明確な範囲を定めることができ、その地域に対しては丸山小学校の全面協力のもと、小学校で行事のピラの配布やポスターの掲示、近隣住宅へのポスティングを行うなど、ともだちフェスティバルの開催をアピールできた。地域の方の集客数ではなく、今回地域を意識して取り組んできたことは、今後こういった行事を通して地域と繋がっていく大きな収穫になったのではないかと思う。



当日は、初めての行事に子どもたちも戸惑いながらスタートしたが、時間が経つとともに元気に店番をする子や、色々なブースを楽しそうに回る子どもの笑顔が増えていった。各施設のブースを回るだけではなく、1時間おきに開催したイベントでは施設の垣根を超えて共に楽しみ、笑い合う姿もあり、一定のねらいは達成できていたように思う。しかし、振り返ってみると今後改善すべき点も多くあり、改めて行事を創り上げていく難しさを感じた。

ともだち運動会という大きな伝統行事を廃止し、新たな行事を企画することは、私たちにとってチャレンジだったが、これまでの形にとらわれず『今』に目を向けて前進する大きな一步となった。

第20回子ども将棋大会

文責：平和の子子どもの家

谷川 勝敏

- 【日 時】 2016年1月23日（土）13:00～16:30
- 【会 場】 育徳コミュニティーセンター1階 早川記念ホール
- 【参加施設】 10施設 育徳園・平和の子・やまと・都島・四貫島・今池・愛染橋・望之門・長居・阿さひ
- 【参加人数】 91名
- 【大会内容】 名人リーグ（上級者）、金リーグ（中級者）、銀リーグ（初心者）の3つのリーグに分かれて対局。終了後は金、銀リーグ参加者の5名による団体戦を実施しました。また＜と金リーグ＞と称してオープン戦も行いました。
指導対局は私が担当。多面指しの盤の前には「たくさんの相手だから、勝てるかもしれない！」といった顔がすらりと並びました。

「貸出用の盤と駒が古くなつたので新調したんです。ここに捨てますね。」将棋連盟の職員が私を見て笑顔でそう話しかけました。「じゃあ、このゴミは私が責任もって捨てとくから。」15年以上も前の関西将棋会館での出来事です。有料で貸し出すには難がある盤と駒でしたが、遊び道具としては十分に使えます。各施設に配ることはささやかな普及活動のスタートでした。

盤と駒があれば将棋は出来ます。たくさんあれば大会が出来ます。運営スタッフが必要ですが・・・。次年度は有志で運営をする形で第21回子ども将棋大会を行います。指導員の皆さんに将棋の素晴らしさ、楽しさを伝えていきたいと思います。指導員が将棋を楽しむ姿、子どもたちと対等に対局する姿を想像しています。子ども達に「負けました」と投了している指導員。いいじゃないですか！

たった40枚の駒、81マスの盤。そのゲームは江戸時代にも盛んでした。将軍が当時の名人を江戸城 御黒書院の間に呼んで対局をさせていました。名人は世襲制。当時は、大橋家でした。初代名人 大橋宗桂の指していた将棋と現在の将棋は全く同じルールです。驚かないですか？400年以上も前に人気があったゲームがそのままですよ！

囲碁もそうですが、大流行したわけではないんです。難しいだろうと、食わず嫌いの人々が少なくないゲームです。ところが、その魅力に気が付き、夢中になると一生の友になります。「棋は対話」「盤上心鏡」「無心」「心技」「静観」「新手一生」「虚心」「一徹」棋士の座右の銘には人生感が表れています。大げさですが私個人の人生は将棋を中心に動いてきました。将棋は文化なのです。

ともだちドッジボール大会 2015

文責:今池こどもの家 多賀井 潤一郎

【日 時】 2015年5月31日(日)9:00~16:00

【場 所】 大阪市立長居小学校

【参加施設】 11施設(愛染橋児童館学童クラブ・阿さひ保育園つくし会・育徳園子どもの家・今池こどもの家・今川学園子どもの家・四貫島友隣館子どもの家・長居子どもの家・望之門学童クラブ・平和の子子どもの家・都島児童館・やまと保育園子どもの家)

【参加人数】 320名

【成 績】

★Aの部 (1年生) ★

優 勝 今川学園子どもの家
準優勝 育徳園・四貫島合同チーム
第3位 育徳園子どもの家②

★Bの部 (2年生) ★

優 勝 育徳園子どもの家
準優勝 阿さひ保育園つくし会
第3位 愛染橋児童館学童クラブ

★Cの部 (3・4年生) ★

優 勝 育徳園子どもの家①
準優勝 育徳園子どもの家③
第3位 育徳園子どもの家②

★Dの部 (5・6年生) ★

優 勝 愛染橋児童館学童クラブ
準優勝 望之門学童クラブ
第3位 やまと・今池・今川合同チーム

「より多くの子どもたちが参加できるように！」
そんな願いを込めて日曜日開催で実施された

『ともだちドッジボール大会』は、なんと今年度で
第30回目を迎える節目の年となりました。

当日は快晴で、朝から気温がどんどん上昇し、

とても暑い一日となりました。会場の大坂市立長居小学校には、

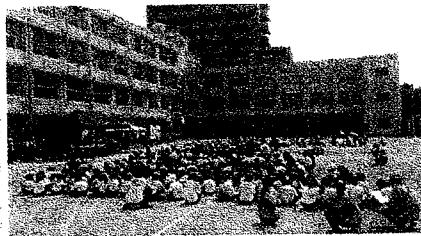
朝早くから11施設約320名の小学生が集まりました。かつては
選手として参加していたOBやOGたちも運営スタッフとして各施設



からお手伝いに駆け付けてくれ、

懐かしい雰囲気で近況を報告し合う姿は、出身施設は異なって
いても、まるで同窓会の一場面のような様子でした。

この日、ドッジボールを通じて大地協仲間と一緒に汗を流した
子どもたちの笑顔は充実感に満ち溢れ、最高に輝いていました。



ともだちフェスティバル

文責：やまと保育園子どもの家

角中 恒介

【日 時】 2015年11月3日（祝）9:00～15:30

【会 場】 大阪市立丸山小学校

【参加施設】 10施設

愛染橋児童館学童クラブ・阿さひ保育園つくし会・育徳園子どもの家・今池こどもの家・今川学園子どもの家・長居子どもの家・望之門学童クラブ・都島児童館・やまと保育園子どもの家・平和の子子どもの家

【参加人数】 326名（うち小学生277名）

【ね ら い】

- ・地域の方にも自由に参加してもらい、楽しんでもらえる会を目指す。
- ・施設間の交流を深め、繋がりを築いていく。
- ・見ても参加しても楽しい会を子どもたちと共に創り上げる。

昨年度、第44回を迎えたともだち運動会。

長きにわたりたくさんのお子さんたちが楽しんできたこの行事は、数を重ねる中でその時々の時代背景や環境、スタッフの思い、子どもたちの個性に合わせて様々な形に変化してきた。そして、今年度は“地域”“交流”をより強く意識した『ともだちフェスティバル』という全く新しい形にリニューアルした。



春のあそび王国2015

文責：四貫島友隣館子どもの家
舟島 直樹

【日時】2016年3月5日（土）13:30～16:00

【場所】大阪市立長居小学校 体育館

【参加施設】10施設（愛染橋児童館学童クラブ・阿さひ保育園つくし会・育徳園子どもの家・今池子どもの家・今川学園子どもの家・四貫島友隣館子どもの家・長居子どもの家・望之門学童クラブ・都島児童館・やまと保育園こどもの家）

【参加人数】152名

【大会内容】4つの遊びコーナー（けん玉コーナー、輪投げコーナー、すごろく・紙相撲コーナー、運動種目コーナー）、けん玉施設対抗戦、けん玉段技名人戦

天候に恵まれ、10施設152名の小学生が長居小学校に集結した。「けん玉大会」として多くの小学生を迎えてきたが、今年度をもって春のあそび王国は最後となった。インフルエンザが流行っていて参加人数が少なくなってしまった。あそびコーナーではけん玉をはじめ輪投げ、すごろく・紙相撲、スポーツチャンバラなど様々なあそびを取り入れ、自施設の子どもだけでなく他施設の子どもとも一緒にあそび、子どもも大人も笑顔であそびを楽しんでいた。日頃、携帯ゲームで遊んでいる子どもたちがあそびを通して多くの子どもたちとふれあい、競い合う面白さを体験できるひとときであった。

けん玉 施設対抗戦 結果

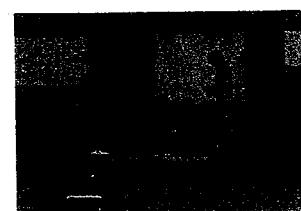
優勝 四貫島友隣館子どもの家
準優勝 長居子どもの家
三位 都島児童館



施設対抗戦の様子

けん玉 段技名人戦 結果

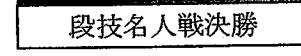
優勝 石森 恵太（長居）
準優勝 嶋田 聖哉（四貫島）
三位 大平 匠透（都島）



段技名人戦決勝

けん玉コーナー 結果

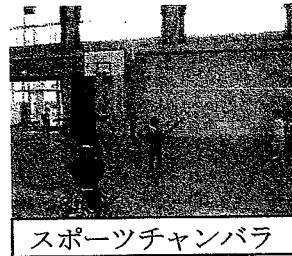
《世界一周》	一位	野元 美来
	二位	石森 梨愛
《日本一周》	一位	石森 恵太
	二位	宮垣 昂司



すごろく・紙相撲



輪投げ



スポーツチャンバラ



けん玉連続記録

第64回大阪市子ども卓球大会

【日程】平成28年3月6日（日）

【会場】住吉青少年会館付設体育館

【参加人数】8チーム 92名

チーム（施設名）	人数
阿さひ保育園つくし会	7名
育徳園子どもの家	30名
今池子どもの家	3名
長居子どもの家	4名
望之門学童クラブ	15名
都島児童館	12名
大阪市立西淀川中学校	9名
T's Zero	12名
計	92名

3月6日今年は住吉青少年付設体育館で子どもたちの熱い戦いが始まった。この日の為にこつこつと練習を積み重ねてきた子どもたち。1年生は初めての対外試合となる。初めて出会う仲間、大勢の保護者の視線等様々なプレッシャーを感じながら試合に挑む。施設内で負けても何も感じなかった子どもが試合に負け、初めて悔し涙を見せたり、また反対に、自施設以外の人に初めて勝ち、その喜びを体いっぱい表現する子。。・様々な姿を見せてくれた。学年が上がるにつれると、1セット1セット丁寧に、真剣に相手に向かう姿がよくみられる様になる。その姿を施設に関係なく1年生2年生が目を輝かせながら見ている。その様子を見て、フォームなどの技術を盗み腕を上げることは勿論だが、1年2年3年こつこつ練習を重ねれば、何年後かには「自分もこんな風になれるんだ」と、より具体的に将来の自分の姿をイメージできる場になっているのではないかと感じた。

午後からは、昨年度の「卓球指導者研修会」を振り返る中で、「子どもたちも一緒に講師の先生よりご指導いただきたい」と言う声から、今年度はこの大会に講師として、毎年、卓球指導者研修会でご指導いただいているT'sZeroの寺田先生をお招きし、子どもたちへ直接ご指導いただく時間を設けた。バック・フォア・サーブごとに分かれて丁寧に指導してもらう。低学年や消極的な子が遠くから様子を見ている姿があったが、指導してもらっている高学年・中学生の顔からは「強くなりたい」「上達したい」という想いが滲み出していた。

この大会を通して、改めて子どもたちの成長を感じる。技術面だけでなく心の成長も手にとるように見える。それは、「卓球大会で勝つ」と言う「目標」に向かって、日々こつこつと練習し、悔しい思い、嬉しい思いを繰り返すことによって育まれるものだと思う。この卓球大会がいつまでも子どもたちの「目標」であり続けることを願う。

2015年度 ワークキャンプ 活動報告

文責：望之門学童クラブ
大西 奈々子

ここ数年、ワークキャンプの参加人数が減少傾向にある。（前年度の活動報告では「魅力的なイベントの発案。ワークキャンプの意義を子ども達に」と、まずは減少傾向にある参加者の増員に取り組むとの報告があった。）

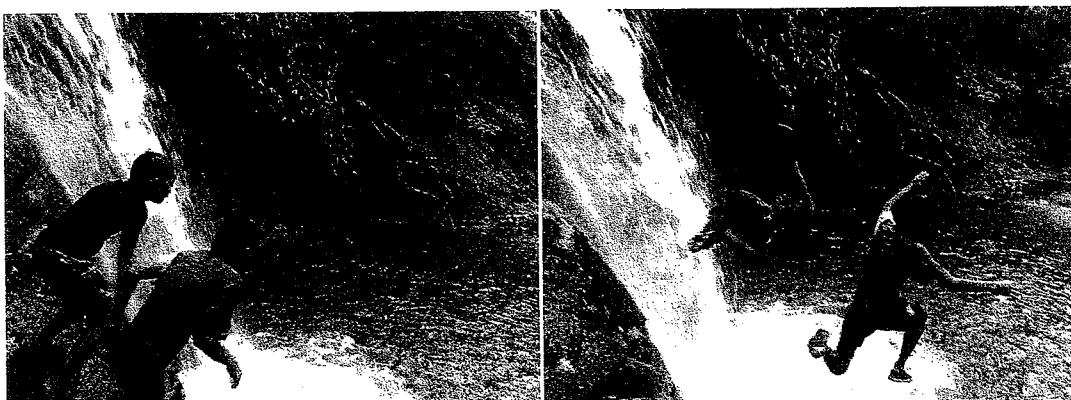
年度当初に地域の子ども研究会でワークキャンプについて、近年の子ども達の参加人数減少にあたり『子ども達にとって自然体験活動・ワークキャンプ活動は必要か』と討議した。その中では「非日常の体験」「人格交流の場」「社会性が身に着くことへの期待」「自尊心・他尊信の獲得」など【自然体験活動が必要】との意見が多数であった。しかし一方で年間計画を立てる為実施日を検討し始めると、子ども達の学校行事やクラブ活動・習い事等調整がつかず、更に参加できるスタッフの不足など「必要・やってあげたい」という願いと「日々の生活・忙しさ」という現実的な課題に直面し、大きな変化をもたらすことなく参加人数が減少傾向のまま実施を終えた。

中高生となった子ども達は、いきなりワークキャンプ活動には来ない。日々の施設での関わりの延長にワーク活動がある。近くにいる施設職員が中高生となった子ども達と関わる中で、それぞれにどういった居場所・人との関わりが必要かを感じとり、そこに向けて繋げていく事が施設職員に求められる役割となってくる。

そういう意味では、近年の参加人数減少傾向は“子ども達にとっての居場所・人との関わりが必要”と感じる子どもたちも減少しているのだろうか？

おそらく、地域の中で人と共に育ち、時に悩みながらも身近に相談できる存在を持ち、充実した生活を送っている子たちもいるだろう。しかしそうではない子もいたはずで、今現在もいるはずである。その子たちに気付けていない、また繋げられていないという危機感を持たなければならない。

次年度以降、ただ単純にワークキャンプ活動実施日が増えれば良い・参加人数が増えれば良いというものではない。子ども達に“今”何が必要か・どういった人との関わりが・どういった居場所が必要かを感じとり、中高生がワークキャンプ活動や大地協行事に安心して集い、繋がり合える居場所となるよう、まずは日々の施設での関わりを豊かに持ち、地域の子ども研究会にニーズを持ちより、ひとつひとつ形にしていきたい。



研究活動の報告と1年の振り返り

- あそび研修会について
- 研究会時間内での情報交換について
- 第14回児童部会について
- 指導員一人一人の振り返り

あそび研修会

文責：阿さひ保育園つくし会

大川 亜紀

【日時】6月22日(月)19:15~21:00(受付開始19時)

【場所】社会福祉法人 清栄会 阿さひ保育園

【参加人数】51名(10施設)

【講師】泉州ひまわりネット所属 おもちゃ研究家 梶山 浩三 氏

【ねらい】研究会スタッフの学びや加盟施設職員のスキルアップになるよう企画

【内容】室内でも楽しめる工作あそびをテーマに、身近な素材や自然物を使った工作と一緒に作り、作ってあそぶ楽しさを実感する。また現場で活かせる手作りおもちゃを紹介してもらう。

「研究会スタッフの学びや加盟施設職員のスキルアップにつながるもの」を目指し、今年度の研修会は前年度の参加者からの声を受けて「あそび研修会」を行った。あそびといっても、手芸、クラフト、おもちゃ作り、自然物を用いたあそび、身体を動かすあそびなど様々である。研究会スタッフ、現場職員が日頃の保育に活かせるようどういったあそびを求めているかアンケート調査を行った。おもちゃ作りと自然物を用いたあそびに意見は集中した結果となった。当日は講師の方から「牛乳パックとんぼ」「ストローとんぼ」「丸太の壁飾り」を教えて頂いた。実際に、一緒に作ることでよく飛ぶコツや子どもへの教え方など習得できた。また簡単に作れるが完成度が高く、子どもに教えたいくつ手作りおもちゃを学ぶことができた。自然物には小枝、丸太(直径20cm厚さ1cm)、

豆(市販)を用いたが、どんぐりや松ぼっくりなんかを用いても良いと思う。紹介して頂いた手作りおもちゃはどれもユーモアがあり、子どもが喜びそうなものばかりだった。「作ることが目的ではなく、作ったおもちゃであそぶことが目的」とおっしゃっていた。保育の中で、子どもと一緒に手作りのおもちゃであそぶ楽しさを味わう大切さを実感した。

次年度の研修会の在り方やどういった内容の研修会にしていくか検討し、意識を高められる機会にしたいと思う。

《参加者からのアンケートまとめ》

- ・作って遊ぶ内容から「楽しい研修」を実感した参加者が多かった。
- ・今回の研修を通して子どもの気持ちに共感できる経験ができた。
- ・現場で即実践できる手作りおもちゃの情報収集の際、泉州ひまわりネットを参考にしたい、との意見。

情報交換について

文責：都島児童館

藤原 由佳子

■『大地の子』

毎月担当の施設が、各施設における活動や地域での活動、施設紹介など自由な内容で発行しました。職員だけでなく施設に通う子どもたちや保護者へも、大地協加盟の各施設とのつながりが意識できるよう、館内での配布や掲示を通して情報を発信できる機会となりました。

■研究会時間内での情報交換

「現場での悩みを共有し、実践に活かす」という目標を掲げ、研究会時間内での情報交換を実施してきました。様々な支援員が集まる研究会の特性を活かし、開始当初はまず研究会1年目の支援員からテーマを発題していく、順番にスタッフ全員が発題できるよう持ち回りで毎週15分程度行います。行事や日々のプログラムを考える上でのアイデア交換や、実際に施設として取り組んでいる支援の方法、またケース検討なども含め、話し合いの内容は多岐に渡りました。今年度取り組んだテーマは以下の通りです。

地域の子どもたちとの関わり方

縦割りグループでの取り組み・アイデア

キャンプでの取り組み・過程・雨プロ

相方とのパートナーシップについて

不審者対策

地域に遊びに行き、自然物を使って遊ぶ方法

OB・OGが帰ってきやすい取り組みや工夫

保護者のL I NE グループについて

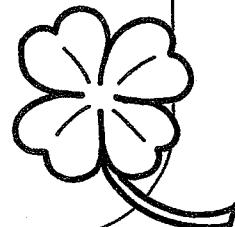
職員の勤務体制について

不登校児の受け入れや配慮

おやつクッキングのアイデア

気になる児童のケース検討（2件）

気になる保護者のケース検討



経験年数や保育観、施設や地域事情も様々な他施設支援員が集まる研究会で、それぞれの支援員が悩みを共有し、意見を出し合うことは、お互いの知識や保育に対する思いを高め合う機会となりました。どの支援員も分け隔てなく意見を出し合える時間を、研究会の活動の一つとして持ち続けていく事により、一人一人のスキルアップと同時に、施設での実践へと活かし、子どもたちのよりよい生活・成長につなげて行きたいと思います。

第14回 児童部会

愛染橋児童館学童クラブ

星里 真衣

【テーマ】学童保育の原点を探る～子ども・指導員の今昔物語～

【日時】2015年9月12日（土）午後5時～13日（日）午後3時

【会場】びわ湖セツルの家（NPO 法人大阪市地域福祉協議会 自然体験施設）

【主催】日本地域福祉施設協議会・NPO 法人大阪市地域福祉協議会

【参加者】児童館、学童クラブ、学童保育、子どもの家、放課後児童施設、NPO 関係者、ボランティア、研究者、行政関係者、学生 他 25名参加。

〈1日目 交流会〉

今年度の児童部会は、今回初めての試みとなる、交流会からスタートした。びわ湖の浜辺で、食事をしながら、施設長や現場の職員が自由に語り合える交流会となった。交流会の中で、「先人たちの思いを知る」というテーマに沿って、地域福祉の諸問題をもとにセツルの家が出来た頃の座談会の一部を紹介した。その歴史や先人たちの思いを知ることで、今の地域福祉について改めて考えたり、次世代に引き継いでいくため、守っていきたいものなどの話をすることができた。

〈2日目 第一部

海外(オーストラリア)の学童保育の実践・エピソードから学ぶ今日の学童保育〉

【講師】まなびおキッズ インターナショナルクラス キッズ指導員リーダー、松本遼子氏

【内容】松本氏よりオーストラリア ピクトリア州の保育制度、年間スケジュールと一日の流れ、子どもの遊びや玩具の紹介、おやつ紹介など。

グループディスカッションでは、「自施設に一週間後、母子共に日本語が分からない外国国籍の子どもが入所することになったとき、どう準備し、対応するか」をテーマとし、想像できる問題点や受け入れ態勢などの話し合いをする。

〈2日目 第二部 大地協先人たちの学童保育を紐解く～子ども・指導員の今昔物語～〉

【内容】①昭和61年指導員座談会を再現し紐解く、とし当時の座談会を紹介する。その後ディスカッションでケース検討を行い、当事者にとっての支援とは何か、子どもの成長過程を見据えた上での援助の視点で討議がなされた。

②「学童保育の役割と必要性」を紐解く、として“地域福祉についての悩み・壁”についてディスカッションを行う。地域に出ていくための具体的な方法を討議する。

1年を通して

育徳園子どもの家

隈元 まひる

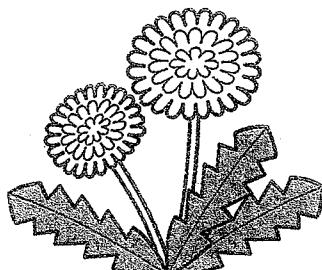
『つながり』について考えた一年だった。

新しいメンバーを迎え、研究会メンバーのつながりをどのように作り、これから地域の子ども研究会をどう進めていくのかから始まった。研究活動や児童部会を通しては、保護者との信頼関係の築き方、指導員・福祉施設職員の先人たちの残した資料より今のそしてからの課題とは何か、そして地域へ目を向けることとは等々なつながりを考え話し、日々の保育へどう生かしていくかを模索してきた。その中で、卒園生である高校生と学童期の話をした時の「親が行けって言うから気がついたら行っていた」という言葉が印象的だった。小学校1年生時保護者が選んで学童に入ってくる。子どもたちは遊び、笑いながら成長し、自分たちが行きたいから学童へ来るようになる。彼らが通う中で感じたことと思っていたことに、学童とは何か、学童だからできることは何かが隠れており、それを聞いて振り返り日々の保育へ活かしていくかなければならないと痛感した。

そして子ども一人ひとりの周りには、家庭・学校・友だち・塾・地域等いろいろな世界がある。その子を支援するということは、周りのいろいろな環境を知りつながることから始まる。また乳幼児期から育って今があり、日々の営みが中学生、高校生、大人へとつながっている。保育所や各学校との連携の重要性を益々感じている。

2015年4月より子ども・子育て支援新制度がスタートした。留守家庭対策事業として学童は、財源の一定確保や指導員数、施設の設置基準、専門の資格認定などの制度が整ってきた一方で、制度にしばられることが多くなっているように感じる。しかし、私たち指導員が子どもたちの豊かな成長・生活のために子どもたちと向き合っていくことに変わりはない。

大地協の改革をきっかけに、改めて『地域の子ども研究会』とは何だろうかということを参加している11施設14名の指導員で討議を重ねてきた。来年度より地域の子ども研究会の原点にもどり、子どもたちも、私たち自身もたくさんの仲間を巻き込んで豊かに楽しく成長していかなければと思う。



2015年度 振り返り

阿さひ保育園つくし会

吉野 裕志

今の園に来て7年。自分が来た時に入ってきたこども達が中学生になった。6年間毎日会っていたみんなと会えなくなる事にはじめはすごく戸惑った。それでも帰り道に、夏休みや冬休みの宿題をやりに、行事のお手伝い、上の学年に中高生とふと立ち寄ってくれた時、様々な形で会いに来てくれて、それがすごく嬉しかった。

嬉しい反面、自分がいなくなった時に、今と同じように戻って来てくれるか不安になった。自分が関わりのないOB・OGのみんなは手伝いに来てくれる。自分の後の先生の時には助けに来てくれるのか？自分の知っている中高生や6年生に聞いてみたらはっきり言われた。「行くわけないやん」

指導員が変わるだけで戻ってこられなくなる場所なら、そこはみんなの居場所では無いと思う。そうずっと思っていた。「指導員も場所も全部あるから戻ってくる」となにかの研修で誰かが言っていたのを思い出す。どちらかが欠けたら戻ってこられない？施設として地域とのつながりを意識するなら、中高生とのつながりも考えていかなくてはならない。保育園を卒園したから終わり。。。ととらえてしまっているのでは？同じ保育園内にあるにも関わらず学童は別と思っている人が多い？

いろいろな疑問が出てくる。

今年は阿さひでバザーが行われた。

たくさんの人に助けられた、声をかけてもらった。「だいじょうぶ？」「手伝いいつでも言うてね」「なにか困っていないか？」たくさんの言葉でどれだけ助けてもらったか。

それと同時にたくさんの人々に迷惑をかけている。。。という、一種の罪悪感のようなものを感じる。

正直、人とつながるのはめんどくさい。1人ではなにも出来ないのに、1人でいる方が楽だと思ってしまう。大人であればあるほど本音と建前が違う。その違和感がたまらく嫌いだ。いっその事、全部捨ててしまったら楽で、距離を置きたくなってしまっても、周りの人間はがんがん近くにやってくる。気がつけば、自分も声をかけていた。「だいじょうぶですか？」

本音と建前が違うかなんて、心が読めない限りわからない。それに本音と建前が違ってもいいのでは。。『やらない“善”より、やる“偽善”』だ。と、なんかのマンガで主人公が言っていた。

時には意見が違いもめる事もあるだろう。ちょっとした言葉で相手を傷つけてしまったり、傷ついてしまったりする時もあるだろう。

どれだけ人とのつながり重荷に感じても『つながり』というものはそう簡単に捨てられるものではないらしい。

じゃあどんなにしんどくてもやっていくしかないのだろう。

2016年度。。。

施設では中高生活動を施設全体で考えていきたい。

研究会では、どれだけ意見のすれ違いがあっても1年一緒にいたみんなとやっていきたい。

2015年度を振り返って

長居子どもの家

大山 椎子

今年から大阪市の制度が変わり、長居子どもの家も2施設に分かれた。それに伴う準備、保護者や子どもたちへの説明と2015年度はいつもと違い、慌しくスタートした。

地域の子ども研究会でも、行事や研究の方向性を考えたりと研究会のあり方を見直す、変化の1年だったと思う。私自身、地域の子ども研究会は自分が求めるよりも多くのことを学び、考え知る場所となっている。自分の考えだけでなく、他施設の支援員の皆さんひとりひとりの考え方を知ることができ「なるほどな」と考えることばかりである。

研究会参加施設それぞれ、子どもの人数や施設の方針、施設がある地域・地域性が違う。しかし、皆、根底には「子どもの最善の利益」という言葉があると思う。その同じ言葉を持っているからこそ、理解し学びに繋がっているのではないかと感じている。

長年、研究会の年間テーマとなっている「地域の子どもたちの豊かな生活・成長をめざす」自分の中では、なかなか達成できないテーマであると思っている。理由としては、子どもたちはそれぞれ違う保護者、環境の中で日々過ごし成長している。また、子どもたちが住む「地域」も日々変化している。その中で、決定的な解決方法はなく、子どもたちと毎日関わる私たちは試行錯誤の連続であるからである。しかし、地域の子ども研究会に参加する支援員は、色々な角度からテーマを考え、学ぶチャンスが与えられている。そして、そのチャンスを活かし目の前にいる子どもたちへすぐに反映することが出来る。これからも、このテーマを達成することはないと思うが、地域福祉施設で子どもたちに関わる支援員として、ずっと心に持ち続けなければならないとても大切なテーマだと思う。そして、それが「子どもの最善の利益」に繋がるように、地域の子ども研究会でもっと深く学び続ける必要がある。と感じた2015年度であった。



1年を振り返って

長居子どもの家

川畠 亮輔

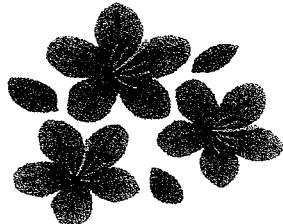
ある日、OBの中高生と話していると本人の学童時代の話になった。いろいろな話をしている間に盛り上がり、時間はあっという間に過ぎていった。話の中に大地協の「行事」の話が出た。「ドッジや運動会は他の施設みんな敵やった。」「仲良くなろうとは思っていない。」その言葉を聞いて驚いた。私が意図して行ってきた事が子ども達にうまく伝わっていなかった。私は各行事の中で共に戦いその中でお互いを認め合う「ライバル」や「仲間」を作り色々な人間関係ができ、それが子ども達の豊かな成長に繋がると思っていたが、子ども達からしたら自分たちの施設の中の団結はできるが、他の施設とは対立してしまっていたのであった。

そんな中、今年度ともだち運動会から、ともだちフェスティバルに行事の名称も内容も変わった。ねらいを3つ立て、その中に「施設間の交流を深める、築く」というねらいを立てた。そのねらいに沿って施設対抗色を無くし、交流がメインで誰もが楽しめる大会を目指した。

フェスティバルでは色々なイベントを行った。その中では、全員で手をつなぎ、静電気が全員に伝わるかというイベントを行った。他の施設の子ども、指導員、保護者、中高生等、全員が手をつなぎ輪になった。300人近くの人の内のほとんどが、年に数回会うか会わないかの関係であるのにも関わらず全員で一つの事をしようという一体感は何とも言えない喜びがあった。

このような行事の経験をしていたら、私と話した中高生のOBの行事に対するイメージや思い出は違っていたのではと思った。「敵」ではなく、一緒に遊んだ「仲間」や「ともだち」に変わっていたかもしれない。もちろん、ともだち運動会が悪かった訳でもなく、フェスティバルがとても良いという訳でもない。どちらも子ども達にとって、とてもいい経験である事には間違いない。どちらが優れていてどちらが正解なのか私には到底わからない。しかし考える事はできる。そして一緒に考えてくれる同じ志を持った仲間や先輩がたくさんいる。

これからも考える事をやめず、今の子ども達にはどんな経験が必要なのか、そしてどうすれば豊かな成長に繋がるのかを考え、仲間や先輩方と日々最善を尽くして子ども達と向き合い、考え、大地協加盟施設の子ども達や地域の方たちと、交流を深め、「敵」ではなく、もっと良い関係を築き、よりよい子どもの成長に繋がって行くよう努力して行きたい。



地域の子どものたちの豊かな生活・成長を目指す

1年間を振り返って

やまと保育園子どもの家
坂本 晴佳

一年を振り返って、今年度私自身は施設合同行事の実行委員長を務めさせてもらい、そこで11施設をまとめる大変さや、行事の進め方など身をもって経験することができ良い機会となった。行事が終わるまでは大変だったが、当日子ども達のいきいきとした顔や、「楽しかった！また来年もしたい！」という声を聞くと、様々な施設が集まって一緒に遊んだり競い合ったりする場は必要だと改めて思うことが出来た。

研究活動では、『遊びと育ち』についての研究をおこなった。そこで遊びを通して子どもたちがどのような力を身に着けていくのか、遊びが子どもたちに欠かせないものであり、どれだけの影響を与えていたのかを改めて学ぶ事が出来た。

子ども達にとって遊びとは生活の大半を占めるものであり、遊びを通して他者との関係を築いたり、コミュニケーション力など、成長していく上での必要な力を身に着けていったりするのである。子どもの家の生活の中では、体を動かす球技遊びや集団遊びなど他児と関わって遊ぶ姿が見られる。しかし、帰宅した後はどうだろうか。大半の子どもが“ゲーム機”で遊んでいるに違いない。子どもたちに休日の過ごし方を尋ねたところ「友達とゲームをして遊んでいる。」という答えが返ってきた。ほとんどの子どもがゲーム機を所持している。それほどゲーム機には子どもを惹きつける魅力がいっぱい詰まっているのだろう。また子どもだけではなく日々、仕事や家事や育児に追われている保護者にとっても子どもがゲームに夢中になっている間は用事を済ますことができ都合のいいものになっているのではないだろうか。最近では、小学生だけではなく幼児の子ども達からもスマートフォンのゲームで遊んでいるという話を聞くことがある。時代や社会の変化と言ってしまえば仕方がないのかもしれないが、便利で暮らしやすい世の中になった反面、対人関係やコミュニケーション力などの人にとって必要な力が阻害されてきていると思う。

子ども達には、子どもの家に通っているからこそ、同学年、異年齢、大人との関わりを大切にし、広げていってほしい。自施設の中だけではなく、他施設との合同行事や地域の人との関わりの中で様々な人がいることを知り、何かあった時には頼れる友達や大人が側にいることや、子どもの家の指導員が変わってしまったから、子どもの家に帰って来にくいという環境ではなく、通っていた施設の中には自分を見てくれている大人が居るという事を知ってほしい。その為に子どもの家だけに留まらず、保育園側との交流など様々な人と関われる機会の提供をしたい。また遊びにおいても、昔から伝わる様々な遊びや人と関わって遊ぶ楽しさを伝えたりできる指導員や保育士でありたい。

研究会を振り返って

今川学園子どもの家

佐藤 剛

今年度の研究会を一文字で表すと「改」である。この一年、研究会としても大地協としても、まさに改革・改変の年だった。

行事においては、四大行事の中でもメインでもあった「ともだち運動会」が、「ともだちフェスティバル」とネーミングも内容もリニューアルされ、自由度が高いものとなり開催された。「春のあそび王国」「将棋大会」は今年度ラストイヤーを迎えた。児童部会は、昭和50年代から発刊されていた「地域福祉の諸問題」を現学童支援員で読み解き、過去を知り、現在を見つめ、未来について考えた。まさに「故きを温ねて新しきを知る」をそれぞれが体感した部会となつたはずである。研究活動は、それにリンクさせ、支援員の思いと子どもの気持ちを研究する内容を行った。中高大生に成長した、OB・OGと小学生当時を振り返り、どのような気持ちで学童に来ていたのか。そして行事に参加していたのか等詳細に聞き取り分析した。そこから見えてきた、子どもたちのリアルな姿が新鮮だった。

2015年度、地域の子ども研究会という小さなカテゴリーの中でも様々な改革に取り組んだ。過去から継承されてきているものを一新することに、ためらいがもちろんあった。しかし、過去から継続されているフォーマットのまま運営していくことにも違和感があった。視点を変えれば、自分たちで新たなものを作り上げていく力のなさを露呈しているとも感じたのである。今回の新たな取り組みは、新しい一步への自信になった。

私が地域の子ども研究会の担当になって十年目が終わった。十年という期間で、インターネット・SNSの普及によっての、子どもたちを取り巻く遊びやコミュニケーションの変化や「子どもの家」から「学童保育」への移行、「指導員」から「放課後児童支援員」認定資格の取得が必要になるなど、子どもや保護者をとりまく社会的にはもちろん、国の施策、我々職員の環境も大きく変わった。しかし、地域の大切さ、地域との繋がりの必要性は変わっていないと思う。地域の子ども研究会のメインテーマである、子どもたちの豊かな育ちは地域なくしては実現できないと言っても過言ではない。昨今、災害や事件など悲しいニュースが多いが、その中でも地域や人との繋がりがキーワードとなることが多い。10年後の地域の子ども研究会がさらなる発展に繋がっていることを切に願い10年間の地域の子ども研究会の結びとしたい。



1年振り返り

四貴島有鄰館 子どもの家
舟島 直樹

2015年度から四貴島友隣館で働くことになった。以前、勤めていた学童クラブでは、両親のどちらかがいない、あるいはどちらもおらず祖父母と一緒に生活をしている子どもがほとんどであった。また、ご飯をあまり食べてない。何日も同じ服を着ていたり、破れたままになっている。その様な状態の子どもたちが少しでも普通の生活を送れるようにする事に精一杯で、子どもにとっての豊かな生活までは考えられなかった。

年間テーマの「地域の子ども達の豊かな生活・成長を目指す」を考えた時、豊かな生活とは何か？豊かな成長とはどのような状態なのかが分からずイメージができなかつたが、以前の学童クラブでの経験から、子どもの豊かな成長は生活と繋がっているのではないかと思うようになった。生活の基盤が出来ている家庭では心配は少ないが、生活が不安定だと子どもの成長にも様々な影響が見えてくる。トラブルの原因になったり、巻き込まれる姿がよく見られた。その都度、その子どもの気持ちに寄り添いながら、一緒に原因を考えたり、子どもが帰った後に支援員同士で話し合い、どうすればその子ども他の子どもたちと繋がりを持てるかを議論したが、できることには限界があり根本的な解決が出来なかった。この経験を踏まえ、豊かな生活とは家庭が安定していることが大切であると感じた。学校でも家庭でもない「学童」という場所「支援員」という立場から、子どもたちが少しでも「豊かな生活」を送れるように自分なりの方法で、寄り添い見守って行きたい。

以前の学童クラブでは、1～3年生までを見ていた。今年度、四貴島友隣館に来て、初めて1～6年生までを見ることになった。高学年の子どもにどう接するのがよいのかが分からず手さぐりの状態でスタートした。子どもの人数は以前と比べて、半分以下になった事で、ひとりひとりとじっくり関わる事ができた。しかし、反対に大人数で、できた遊びが少人数になるとできなくなることも知り、大人数と少人数の良い点と悪い点を実感しました。

行事では、大地協の行事も含め毎月行事が入っていて行事の多さに驚いた。卓球大会で、互いを励まし合う子どもたち。また、ドッジボールや将棋大会、春の遊び王国でのけん玉などで、優勝するという目標に向かい一生懸命に努力するが、負けて悔しい思いを経験した子ども。行事を通して、子どもたちひとりひとりの思いを身近で感じ、知ることが出来た1年間であった。

子どもたちを取り巻く環境が目まぐるしく変化する
昨今はであるが、2015年度に経験したことを活かし、
これからも子どもたちの心に寄り添い関わって行きたい。



年間テーマと1年の振り返り

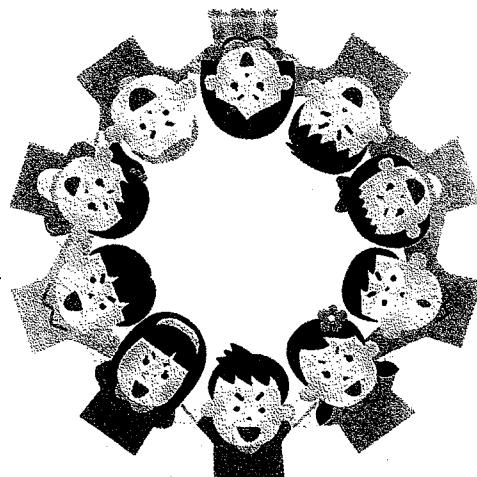
やまと保育園子どもの家
角中 恒介

今年度は、出会う機会やつながる力を育むことの大切さを改めて実感した1年だった。

昨年度は、1年を通して今池こどもの家と様々な機会に交流し、新たな出会いやつながり、仲間作りを意識した1年だった。初めは、照れくささや緊張から交流を嫌がる子どもも多く、私が少し強引に交流の機会を設けているような状態だった。しかし、回を重ねるごとに子どもたちの施設間交流への苦手意識も無くなり、『今池と遠足行けへんの？』『今度の〇〇には今池来るん？』と自然と子どもたちの口から交流の機会や他施設の子どもとの再会を楽しみにしているような言葉が聞かれるようになった。その子どもたちの気持ちの変化や成長が素直に嬉しく、また人とつながる大切さや面白さを強く感じた。

そして、今年度。これまで合同行事や合同遠足では、自施設の参加人数が少ないために、他施設の参加人数に圧倒されていた子どもたちだったが、昨年度の今池こどもの家との交流の成果が自信となり、以前と比べ新たな出会いを笑顔で受け入れる姿、再会を喜び、楽しそうに話し、笑う姿が格段に増えていた。ここでは、これまでの取り組みの大きな成果を実感することが出来た。

また、自施設では今年度から始まった地域の商店街活性化プロジェクトで開催した催しの企画会議に出席し、町会の方や近隣の商店の方とつながり、施設としても保護者や地域とつながるきっかけをつかんだ年となった。



この1年で、新たな出会いの機会を設けることで、それぞれが持っている“つながる力”が育まれ、多くのつながりになっていくのだということを感じることが出来た。今後も出会う機会を意識的に設けながら、子どもたちと共に私自身も“つながる力”を育んで行きたいと思います。

年間テーマと 1年の振り返り

望之門学童クラブ

大西 奈々子

私が地域の子ども研究会に参加させて頂くようになってから早数年が経ちました。その間ずっと研究会のテーマに掲げられている“地域の子ども達の豊かな生活・成長を目指す”という言葉は、数十年前から（言葉を変えつつ）大事にされ、継承されてきた子どもたちへの願いだろうと思っています。

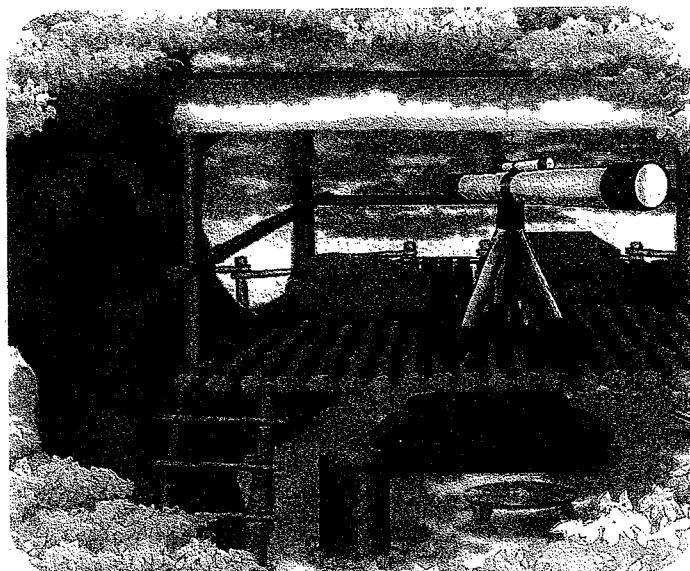
子どもたちの“豊か”という事を考えた時、おそらく「これだ」という答えは1つではないし、私の中でも胸を張って言える明確な答えは見つけられていません。今までの先輩方がそうであっただろう様に、これから私も“豊か”を探求し、様々試行錯誤しながら子どもたちと共に過ごしていくのだと思います。

今年度、自施設を退所する子が数名いました。その子たちは（家庭で留守番が可能になったという点もあるが）「（学童に通っていない）友だちと遊びたい」「やりたい事・習い事が出来た」等の理由から退所の運びとなりました。そういうたよりで子どもたちが学童を巣立ち、地域の中で新たな居場所を見つけ、過ごす事ができるようになった事を私は応援したいと思います。子どもたちが放課後に習い事などの理由で自由な時間が無い・余裕がない事から豊かではないと考える視点もあるかと思います。しかし私は子どもたちが自分で考え、選択し、踏みだした一步を後押ししたいと思います。

では私たち、学童指導員の・施設の役割は何でしょうか？留守番が出来ない子どもたちと共に過ごす大人でしょうか？

沢山の子どもたちがいてそれぞれ違った個性がある様に、子どもたちにとっての豊かさもそれ違うのだと思います。一概に学童に通っているから、時間に余裕があるから、安全な遊び場があるから豊かだとは言えません。子どもたちひとり一人が放課後に「楽しい」「嬉しい」「悔しい」などの体験を積み重ねて達成感や自己肯定感を感じ、人とのつながりの中で経験に変えていく。その先が子どもたちの豊かさに繋がっていくのではないかと思います。その場所はその子によっては習い事の場、友だちと過ごす公園かもしれません。

自施設に通う子どもたちや退所に至った子どもたち、更にその子どもたちの友達や地域で過ごす子どもたちが困った時“あそこに行ったら安全”“話聞いてくれる人がいる”“休みに行こう・頼りに行こう”という安全基地のように…地域で過ごす全ての子どもたちの、安全で安心して過ごせる一つの居場所として施設が・指導員が地域に根差したいと思います。



1年間を振り返って

愛染橋児童館クラブ

星里 真衣

今年度、児童館の指導員1年目として勤め、地域の子ども研究会にも参加させていた
だいた。分からぬことや戸惑いも多く、不安いっぱいのスタートとなりました。そん
な中、1年間学童の指導員としてやってきて、現場の子どもたちとの関わりや、研究会
での取り組みの中で多くのことを経験したり、たくさんのこと学び、内容の濃い1年
となったように思います。

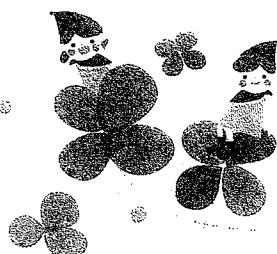
児童館の指導員として、「子どもたちの未来を見据えた保育」ということをたくさん考
えました。4年間保育士としてやってきた中で、この言葉に何度も出会い、考える機会
がありました。その時は、漠然としか考えられていなかったように思います。子ども
たちが、生きていく上で自分の生き方を選んでいけるように、何かに悩んだときにも抱
え込まずに周りに助けてもらえる人や頼れる人がいること、そういう人を自分自身で見
つけていくことを保育の中で、日々の関わりの中で、子どもたちに伝えていきたいと思
うようになりました。

1年間学童の指導員として、学童期の子ども達と関わる中で、「生きていく力」について
考えました。その中で乳幼児期の大人に愛された経験や、認められた経験の大切さに
気付きました。成長していく過程の中で、たくさんことを経験し、喜んだり、悩んだ
り、時には悲しく絶望的になったりする時に、人はきっと周りの人の助けや、今までの
人生の中での愛された経験を糧に、また頑張ろう、という気持ちが持てたり、やってみ
ようという向上心の芽生えに繋がるのではないかと思いました。

「乳幼児期の関わりが将来にも影響する」ということを、保育士として仕事をする中で
は、実感として意味を理解できずに保育をしてきたように思います。しかし、学童期の
子ども達と関わる中でそれが少し分かったように思います。

この1年間で私が感じた事、学んだ事を、子ども達の周りにいる身近な大人として
子ども達に伝えしていくなら、と思います。

1年間、大変なことも戸惑うこと多かったように
思いますが、それ以上に学びの深い、
楽しい1年間でした。



『地域の子どものたちの豊かな生活・成長を目指す
～子どもの成長、それはつながる力を身につけていくこと～』

今池こどもの家 多賀井 潤一郎

『あの子、卓球大会でも強かったけど、将棋もけっこう強かったで～。ドッジボール大会の時もおったかも知れん。今日な～、ちょっとだけ喋ってん。』

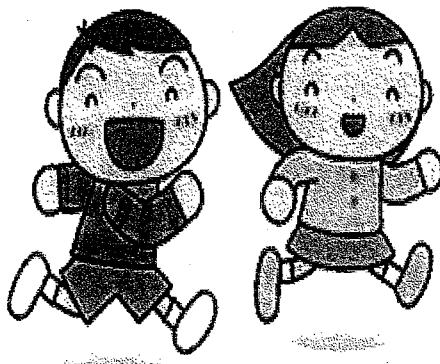
他施設の男の子を指さしながら、早口でN君（6年生）は私にそう話してくれた。この日は、第20回将棋大会で、施設代表として出場していたN君は、一年間練習してきた成果を発揮するために他の誰よりも緊張しながら行事に臨んでいた。施設内ではいつも強気でリーダーシップを発揮する彼であるが、大勢が集まる大きな行事では緊張してしまい、なかなか普段の自分を出せないでいた。低学年の頃から経験してきた「ともだちドッジボール大会」「ともだち運動会」「合同遠足」「卓球大会」「山の家ワークキャンプ」等では、恥ずかしくて自分からは大勢の輪の中に入っていない子どもであった。そんな彼が大地協行事を通して、学年が上がるにつれ、いつの間にか知らない人ともつながる力を身につけていた。もちろん、それに至るまでには仲間の力や指導員の働きかけもあっただろう。しかし、今では自分からつながっている力を発揮している。将棋大会でのこの瞬間は、つながっている喜びを彼自身が今までに実感しているという光景であった。

一年前の秋、5年生から参加できるリバートレッキングに初めて参加したN君は、一緒に険しい道を歩く時に他施設の女の子から『ちょっと待って～。』と声を掛けてもらう機会があり、それまでは話したこともない人とつながってもらえる喜びを体験することができていた。今では、数百人が見守る地域イベントの大舞台でも堂々とマイクを持って話すことができるようになるほど度胸がついている。このエピソードは、彼の成長の過程で何か一つ殻を破るきっかけとなったことだろう。

大地協行事に参加する事で、他の施設の子を知り、次に会った時に親しみを覚え、場を共有する喜びを共に味わったり、一緒に何かを成し遂げるという経験は子どものコミュニケーション能力を高め、豊かで幅広い人間関係を気付くプロセスになっている。

地域の子どもたちの豊かな生活や成長を目指すという目標を掲げて実践している過程で、44年間も続いてきた「ともだち運動会」は今年度から「ともだちフェスティバル」としてリニューアルし、行事を通して子どもが自分の力でつながりを持つことができるようにも工夫され更に進化し続けている。

2016年春、目の前の子どもの今を見つめ、そして未来に生きる人を育んでいくため、日々研鑽し私自身も進化し続けていきたい。



1年を振り返って

阿さひ保育園つくし会

大川 亜樹

地域の子ども研究会に参加しいろいろなことに携わって1年が経ちました。振り返れば「研究会に参加させてください」とお願いしたのが始まりでした。自施設が会場の時だけ参加していた昨年度、当時の研究会メンバーの意見を出し合う姿、行事での姿、反省する姿など見させて頂き、素直に「かっこいい」と思いました。自分も、子どもの為にと強い思いで学童指導員の仕事をしていきたい。参加してどうであったかと問うと正解でした。知らなかったことを知り、考え、体験した。たくさんの人と出会い、話を聞け、心が救われたことも何度もありました。みなさんとの出会いと参加させて頂けたことに感謝です。

今、学童指導員になり2年と半年です。幼児期と学童期はこんなにも違うのか！と子ども時代の成長に戸惑いが隠せませんでした。どんどん成長する子どもに今でも戸惑います。私も子どもと一緒に成長したいと強く望んでいますが、置いて行かれている気さえするほどです。学校から帰ってくると「どうしたの？何があった？」と聞かずにはいられない表情をしている子どもたち。子どもなりに悩みを抱えていたり、心配事があつたり、後悔していることがあったり。いろいろな感情が芽生え、その感情と向き合っている。どんどん乗り越えていき6年生にもなると大人を相手しているようだ。なかなか伝えたいままに伝わらず、言い合いになることも沢山ありました。まだ子どもだが、「自分」を持っている一人前の子もいる。大人の考え方を押し付けてはいけないと実感しました。子どもたちと一緒に過ごす時間は人生のほんの数年だけだが、大切な時期を関わっている自覚を持って、一人一人の性格や考え方をきちんと尊重し、私に向けられている一人一人の思いを受け入れていこうと思います。



地域の子ども研究会に参加して

平和の子子どもの家

谷川 勝敏

自施設の事情により、10月末より地域の子ども研究会に参加させていただくことになりました。一度送別会まで催してもらいながら、少々くすぐったい気持ちがありました。数年が経過していますので研究会のメンバーの大半が初対面。とは言っても、行事運営と研究活動の内容に大きな変化があったわけではありません。前任者を引き継ぐ形で「あそびと育ち～あそび経験が子どもを育てる」という興味深いテーマに沿った研究活動に加わらせていただく中で、若い指導員との討議に溶け込むことができました。

13年前、当時の地域の子ども研究会で行った「遊びの理論と分類」という研修を振り返ります。担当は私と今川学園子どもの家の大川氏（現キンダーハイム）。

＜遊びとは何だろう？人はなぜ遊ぶのか？という素朴な疑問をこの研修を手始めに探求したいと思う＞と当時の私のメモにあります。「遊びと人間」ロジェ・カイヨワ（1958仏）と「木モ・ルーデンス」ホイジンガ（1938蘭）の古典2冊を参考文献とし、個別に読み込んでから考察を述べ合うことにしました。業務後に何度も会い、夜遅くまで語り合ったことを思い出します。10歳以上も年下の大川氏ですが、読書家で理論家。解析力ではかなわないなあと感じました。質より量の考え方で、私は「人間はなぜ遊ぶか」（M・Jエリス）という理論書を探し出して読みふけりました。個人的にすごく興味深い本でした。新たな知識を得た得意げな私は彼との勉強会で披露。ところが彼も同じ本を読み破っていたのです。今思い出しても本当に楽しい勉強会でした。

現在の研究会メンバーは楽しんでいるのかな？表面的には分かりません。共に行事を作り上げ、共に学び、そんな中で切磋琢磨できる間柄。しんどいけれど心に余韻が残る、施設という枠を越えた業務。自分を高めていくことが、子どもたちの豊かな生活・成長を目指す姿勢だと思います。

「大阪市地域福祉施設協議会」の旧名称は「大阪市セツルメント研究協議会」である。この協議会に参加する施設の若い職員たちが様々な研究会を持っている。いずれも「セツルメント」を理念とし、自分がかかわる地域や利用者との関係を模索する。それは地域福祉施設の在り方や、施設職員としての姿勢や使命の追求である。

中略～

施設の中だけではたらいていないか、運営費や補助金の枠の中だけで仕事をしていないか。住民や利用者の声を心で聞いているかどうか自問自答する…。 小掠 昭

楽しいだけでなく、厳しさも大切。仕事ですから。地域福祉施設の職員ですから。改めて小掠先生の言葉を胸に次年度に臨みたいと思います。



地域の子どもたちの豊かな生活・成長を目指す 1年の振り返り

都島児童館
藤原由佳子

今いる場所・今知っていることの内から外へと、目を向けられるような多様な経験をどれだけするか。これが、子どもたちの成長に豊かさをもたらすものであると私は考え、1年間、研究会に参加しながら保育の日々を過ごしました。子どもたちが新たな事柄に目を向け、あわよくば、自分のものにしよう！と感じられるようなきっかけは、子どもたち同士の間だけで、また、施設で日常生活を送る中だけでも無数に見られます。しかし、あらゆる角度から、あらゆる方法を試行錯誤して、意識的にそのきっかけをばらまくことが、私たち支援員の腕の見せ所だと思い、その腕を磨く必要性を毎日のように感じています。

まず私自身が、子どもたちにとって新鮮な存在であろうと、声のかけ方一つをとっても常に振り返り、反省をする日々。そして、自施設としてはどのようなきっかけを投げかけようか、ディリーや月間のプログラムを考える日々。さらに、より刺激的なきっかけとして地域に飛び出してみること。その飛び出していく地域の一つとして、大地協の行事をとらえています。

経験年数や保育観、施設や地域事情も様々な他施設支援員との、週に一度の研究会での会議は、自身の保育を見直し、新たな視点を得るために貴重な学びの場でした。中でも情報交換で意見を出し合う時間は、どの支援員の方とも分け隔てなく意見を交わし合うことができ、現場の声で学び合うという最大の利点が発揮されていたのではないかと思っています。テーマはおやつクッキングのアイデアや児童に対するケース検討など、日によって様々でしたが、その内容とあわせて、それぞれの支援員の方の保育に対する思いを聞くことができました。また、私自身も同じように発言させていただいたことで、自分の思いに気付くことや、自施設の方針の再確認をすることもありました。

今年度、右も左もわからない状況で経験した多くの大地協行事。変革の時期とあり、次世代の研究会を担う者として、参加一年目にも関わらず発言させていただく機会が多くありました。大地協での行事は、なんといっても大規模であり、他施設と盛んに交流できる点が最大の強みです。自施設のみでは担いきれない刺激的な出会いが必ずあります。

地域の子どもの実情を知り、支援員としての資質や技能を高めていくような研究活動と、それを基盤とした刺激的な経験ができる場としての大型行事。これらをより充実させ、深めていくためには、まず日々の保育で自施設の子どもと関わり、目の前の子どもたちを知ることが必要なのだと思います。

今後は有志の施設のみで企画する行事など、研究会参加施設のつながりを活かした柔軟な取り組みによって、子どもたちに還元できるような研究会活動を増やし展開させていくたいと、大地協加盟施設の一支援員として思っています。そして、そこで得たことを活かし、自施設だけでなく全ての子どもたちの未来を明るくする活動を考えられるような支援員を目指し、努めていきたいです。

